

前野漱石編纂

學藝
指針

通身演說
全

駿々堂藏版

特19
433

前野嗽石編纂

學藝
指針
通俗少年演說全

駸々堂本店藏版



序

少年は未來の成年なりこれに實用の才を具へしめざれば悔忽ちにして臻らん左れば人々の學ぶべきはあながち高尚なる理論にのみ限らざれば假又之を會得したりとて實地に應用するとの出來ざりせば螢雪の忍苦將た何の効かあらん、然らば人々如何してか實用の才を得べきと問ふ予は先づ少年をして世事より着目せしむるを以て肝要なりと答へんのみ矣況んや教育の要は子弟をして其毎々見聞する所のものより抽出せる感想を懐かしめて而して漸く純理に進ましむるにあるをや、予の此著あるもの蓋し此意の外ならざるなり故に其社會組織を論ざるや疎かりと

雖ども卑近よ漸く進んで各論よ及べば唯少年をして學藝の一斑を窺知せしむるよ甘んせり而して其説間々學者の信ざる所の軌道の外よ奔れるものあるは一に學問の規矩準繩よ由らざして勉めて少年の思考に適應せしめたればあり、期する所は少年後進の輩の動もすれば高尚なる理論よ馳せ只管幽玄の域よ入らんとするの極之れに昏醉して殆んど他を視るの明なく太たしきは己が脚を立つべきの地さへ自から成し能はざるに至るの弊を其未だ好癖の定まらざるに拯ふて以て其當よ行くべきの途を知らしめんとにあり幸よ少年諸氏が方今繁褥の世に在て自から處するの一助たるを得ば予の勞豈に徒爾からんや、聊か所思を記して

以て序とす

壬辰初夏

城南僑居に在て

前野 曠 石 識

學藝通俗少年演說目錄

第一篇 緒論

(自百一十五頁)

第一回	世態の一斑を述べ	一頁
第二回	原始時代の状態	六頁
第三回	道德の制裁	十頁
第四回	社會の制裁附法律的の制裁	三十三頁
第五回	人類の幸福	五十頁
第六回	人類分業の事及交際	五十七頁
第七回	學藝入門	九十七頁
第一篇	各論	(自百十六頁至百三十五頁)
第一回	言語	百十六頁

第二回	文字文章	百三十三頁
第三回	數學	百四十四頁
第四回	地理學	百五十三頁
第五回	博物學	百六十二頁
第六回	地文學	百七十三頁
第七回	生理學	百八十一頁
第八回	理化學	百八十九頁
第九回	工學	二百九頁
第十回	歴史	二百十四頁
第十一回	倫理	二百四十九頁
第十二回	法律	二百六十七頁
第十三回	經濟	二百九十七頁
第十四回	教育學	三百十七頁

第三篇 結論

(自三百三十一頁
至三百四十四頁)

目錄終

格言集

◎シルレル曰く

世界之大學校なり
困苦之良師友なり

◎スベンサー曰く

英國の今日を致
せしは自力教育を
なせし人の力なり

凡そ志す所の物

を爲さんと欲せば

學藝通俗少年演説
指針

前野嗽石著述

第一篇 緒論

第一回 世態の一斑を述べ

此書を見る少年の諸君よ、著者と今題號のとは里よ少年諸君の思想の契ともなる演説を致します前よ少く申上て置ねをならぬ事を各個別々且よりよくお咄しいたして緒論とする事でもありますが、到底難かしい事と追々でなければお咄しが出来ぬものとして、先づ近い點より申せば

世の中の形態

を觀て考へるのが最良うと存じます、世の中と云へ

必成成就すべしと自ら信じて疑ふ勿れ之れ第一の助かり

◎佐藤一齊曰く

志を立つるの功と耻を知るを以て要とす

◎王陽明曰く 志

立たざれば天下成るべきの事なし百工技藝と雖も未だ志立たざれば舵な

バ—諸君御覽なさい—眞に千差萬別で、此處にハ鋤鉄を乗て米麥をつくつて居ると思へば、彼處は其れを一升貳升と賣つて居る家がある、又棉の花をつくつて出す人があると、カタツポよと直ぐ其れを糸に紡ぐ機械場があり、スルと又其糸を機ようけて反物又織る人がありいたして、其反物が商人の手又廻りくつたり諸君や私どもの着物となる様よ、食べる物着る物をとじめ其他の日用の物品とあるか、粧飾品であらうか何であらうが、皆それくつ製作するのと賣る人があつて、其れを又買ふ人がある、そして又、此様に賣買が出来るに付ては無錢でとなりませんか、貨幣と云ふ者が要るようになる、スルと此貨幣が誰みでも彼にでもいつ何時でも間似合ふて不自由がないとも限らない、否

きの舟、術なきの馬の如し漂蕩奔逸何の底る所あらんや

◎ゴルドン曰く

生活と慨して抱抹の如し只其内よ石の如きもの二箇あり即ち己れ自身の勇氣并ふ他人の困難と對する深切是なり

◎フランクリン十

寧ろ不自由勝なものでありますから茲は借貸と云ふ事が出来る、貸借と云へば—諸君御存じの通り—金持屋の惣兵衛さんよハ澤山貨幣が積であります、唐鉄屋の貧兵衛さんよハサツパリ此大事を貨幣が、ソコデ貧兵衛さんが何り商賣でも始めやうとした處で資本金があい、又ハ正月が来るから小供們よハ二子織の着物の一枚宛も新らしいのが着せし、世間並にお餅も搗きたしと思ふた處が、お情ない咄しですがヤツパリお先に立つのが貨幣でありますから、空を仰いで手を蕩搔いたとて地を叩いて泣たとて貨幣は天うら降りもせぬば又地から湧出も致しません、據るちく貧兵衛さんハ何り資本の要らぬ事でもして一生懸命に働いて要るだけの貨幣を溜めるり、又ハ利足を取られても口

二則中又曰く 所
 有の物品と各々其
 置き場所を定め豫
 定の仕事と悉く時
 間を設くべし
 ◎スコット曰く
 ベンニー（即ち金
 錢）と人の靈魂を
 殺ろし白刃の人の
 肉体を殺す二者相
 比較すればベンニ
 ーの人を殺す事多
 し

惜しくても、貨幣の澤山有る慾兵衛さんの家へ往て借
 りて來ねばなりません、若し又僥倖と商賣にする品物
 を持て居るんや小供們に着せる反物の有る呉服屋さん
 や、餅にする糯米を賣て居る米屋さんや、それく現
 金も拂はせに品物を呉れました處がヤツパリ貨幣を借
 りて置くのでありまして、昔し狡猾い人が詠みました
 戯歌に、「借りますと貰うた様に思ひます現金ならば外
 で買ひます」と云ふやうな亂暴な事が通用したらば大變
 ですけれども、其様の事とならぬものと究まれば貸借
 と云ふと何處までも消ゆるものではありますまい、
 シテ見ると世の中之賣買の世で、それが又貸借の世と
 もありますから、銀行と云ふ金貸商賣も要れば、其
 貨幣を借りて肥料を買ふた農具を調へて米麥を作る

人も要れを、それを又買ひ込で人々を賣る人も要る
 之れも又貨幣が資本でありますから銀行や其他の
 金貸職業の人から借りもせねばならず——何をしても
 要らぬ職業と云ふものもないと申しても宜しいので、
 若し此世の中要らぬ者と云へば夫の袁彦道おどに身
 を持崩す破落戸漢とか、空しく手を拱ねて親や兄弟の
 物を食たり着たりして居て迷惑を掛ける放蕩者でいも
 ありませしやう、しかし此様の厄介者は全で人間でない
 も同然で物の數も這入らぬ人々と云つて「人」と稱ぶのも
 惜しい位なものですから、彼是と論ずるにも及びませ
 ン、此くお咄しを致しますと、ソロく其貸借と云
 ふこの方法から其取締方まで言はねばならぬやうな事
 べて何から何まで悉せぬとでありまするが、之を述べ

るよと先以て社會の成立を考へねばなりません、シテ又社會の成立、取不直世の中が何様な風も出来て居て、人々が何様な風も活計して往くかといふ事を、お咄し申すも先だつて、此世の原始がドンも昧裁で、何様な風で今日の様にあつたかといふ事を述べねばなりません

第二回 原始時代の状態

諸君、此世の原始とどのやうなものであつたであらうかと尋ねませぬ、諸君は一同人間と元來ドンも事から出来たものかとお疑ひなされませう、今此れをお宗旨の方から申さば、我日本國でと神代と申して神様の代を原始と立てます、ソして其由來と申せば、伊弉諾伊弉册の二柱の神様が天神の詔を受けて天浮

◎朱子曰く 陽氣の發する所金石も亦透る精神一たび到らば何事かあらざらんや
◎孟子曰く 萬物

皆我れも備てる身
又反して誠あらば
樂焉れより大なる
とあり

橋も立たせしめて、天瓊戈とかの名劍で滄海を薙がれますると海潮が矛の尖から濶つて自然に固く凝つたのが島であつて、其處に御兩神が夫妻とありてお降りおされてから國が出来て山も出来、川も出来たり草木も生へ蒼生即ち人民も出来たと誌してあります、又西洋のお宗旨でアダムといふ男とイブといふ女とが出来て、此れが人間の創始だと申して、此兩人の出来た由來を全く天帝のお思召から成たといふ事でありませぬ、猶此他にも十人十種で地方の異なる種々も申しまするが、學者は又人の創始を猿だとも申しまして、日本もなぞも舊い諺に、猿と毛が三本足りないので人間も成れなかつたと申すところがありませぬ、大概に似た様かたでありませぬから、此様な事は深く究めるに

及びません、それよりは假令五人でも十人でも人間の出来てからの事を咄し申さねばならぬ、又此方が諸君に向てお利益あるものであります、却説此人間が十人あり二十人あり又二百人あり二百人ありで彼方此方又胡磨鹽を撒たやうに活計して居た頃を想ひ出しまするよ、おかく今の世の様に整った事をかいたのでありまして、其頃の人間の形態を今日下等動物と云つて我々が眼下に見て居る獸類とて餘り軒輕のさい程の事で、たいく眼の周邊もある菓物や野菜のやうな物を餌といたし鳥獸を捕へれば其皮を着て其肉を啖ふと云ふ様を次第、随てまこと又簡單な事で固より文字をばと云ふ高尚な事があるでもあければ、何事でも先を考へるやうの思想をかく、其日暮しの天竺浪人、雨露を

浚ぐよもほんの丸木を柱として其上に茅や樹の皮を屋根と組む位のとて、此處に食物が盡れを彼方へ移り、又其處まで勝手が悪くすれば又其先へ往くと云ふ面白い様で面白くない境涯、是等と諸君も御存じの通りただつい三百年餘の現今の通り繁昌もあつて居る亞米利加の土着人種の活計方ともあつた事、現に亞弗利加の内地は今猶此通の形態で、此様を世界を野蠻世界、又此様の時代を未開時代と申して、今日結構を家と住み結構を衣類を着て、何事も不自由のさい難有い世とあつた國々でも、其根源を繹ぬれば矢ッ張一度と此様を憫れお時があつたのでござります、シテ又かう云ふ時よは諸君が道理の解らぬ人を野蠻だと仰やるやうな兎角道理も疎くて粗暴の事を爲たがりまして、否粗

○洪自誠曰く 悪を爲して而して人の知るを畏る、は悪中猶ほ善路有り善を爲して而して人の知るを急ますると善處即ち之れ照根

◎同氏曰く 悪を聞てと就ち悪む可らず恐らくと説夫の怒りを洩すとを爲さん善を聞てと

暴の舉動をせねばならぬやうな世であるものですから、何れも角も喧嘩争闘が仕事の様である、之れを何ういふ理由かと申しますると、全くと取締と云ふものがあからで、近く申せば政府の様なものもなければ又官吏と云ふものもあゝ——尤も部落々々も首領とかいふものもありましたけれども、之れとても善く道理の譯つたんでありませんから無いも全然です——誰も道理といふ大事の心軸を括つて居る者があゝいのですものを、ナンと諸君どうもア治まつて往きまじやう、成程世の中が悪人のあゝいと定まつたものあらば何も心配するところありませんが、生憎善人をかりであゝいとするとあかしく迂濶々々して居る譯にこゆきません、世が開けて萬事が整つて居る今でさへ東京の淺草とか大

急も親む可らず恐くて奸人の身を進むるを引かん

◎荀卿曰く 君子其己れ又在るものを敬して其天に在るものを慕とす小人其己れ又在るものを敬して其天に在るものを慕とす是れ以て日又進むあり小人其己れ又在るものを錯て其

阪の道頓堀とか申す雑踏の處へ行くと、ツイ觀物や演劇の看板に氣を取られて見て居る間もハヤ拐兒(大阪邊の上方では「チボ」と申します)は懐中の物品を盗られたり袂を截られたり、又田舎で盗賊(ぬすびと)が忍んで座敷の箆笥をあけたり倉庫の貨物を掠めたりして、夫の演劇でする石川五右衛門といふ大盜賊が申しましたやうに石川や濱の眞砂と盡きるとも世に盜人の種は盡きせじで、石川が死んだとて濱もあるアノ澤山の砂がさくさつたとして、無くならぬものと盜賊でとありませんか、況して昔日の亂暴を世で見ますれば、人の所有物と我所有といふ風で、隣家の太郎兵衛の許は何うやら小鳥を澤山持つて居る様だと思へば、自分は遊んで居て獵も漁も出かい様を怠情者が「萬望それを少

天に在るものを慕ふ是れ以て日に退くあり故に君子の日は進む所以と小人の日は退く所以と一あり君子小人の相懸る所以のみは此に在るのみ

◎福澤論吉曰く
善を爲せば心は嫌きの褒めり悪を爲せば心に耻づるの罰あり

し呉れかいかと無心な出掛る、デ優しく頼んで貰ふのこまだ宜しいが、もしそれを呉れぬとあると、殴り飛ばしても打掃いて、も取らうとするよなる、サ—さうあると大變です、直に争闘が始まって理も非も言つたとはない、無茶苦茶に取らうとする遣るまいとするで、究竟る處が腕の強い方が勝とあつて弱い方は何程道理があらうが賢からうが泣いて済さんければなかりませ、此れを即ち腕力世界と申して、何事も腕づく方づく、強いものは遊んで居ても弱いものを苛責さへすれば樂に活計せて弱いものは何程働いても泣き泣き強いのに甘味を啜られて活計さねをかりませ、ナント君此様の世界であつたらばどのやうな口惜しいでありませう、まだく太しいのは今日大切を御婚禮を

◎荻侯泰齋曰く
人を悪むは一己の私より悪を悪むと天性の公あり

◎明太祖曰く
凡そ人善あれば自ら矜るべからず自ら矜れば善日は削らる不善あれば自ら恕すべからず惡日に登す

◎貝原益軒曰く
君子の人と接する

して貰ひますするアノ嫁様です、その嫁様を貰ひますする、自分の氣に入らぬ女でありましたからを、其娘の親意が遣ると云ふまいが遣らぬと云ふがチツトもかまいせん、先方が嫌はふが承知しまいが一向頓着あし腕力づくで取つて來るとが出来る、そして無理往生な女房とするに云ひますが、此様の悪い事が慣習なかりまして、終に嫁と云ふものは扱ひ取つたのであつたから、おらぬ、扱ひ取るものであると定めて仕舞うたから、假令親意が承知して呉れるのでも今の御祝儀の様の事を爲ませんで、婿様が約束の日もあると嫁を扱ひよ往くとよしてある、スルト嫁様と嫌でもかゝいのに森の中かどへ逃込で扱はれまいとする、それを逐ひまじして擯いで歸るのが夫婦ある時の儀式だとして、實は馬鹿

禮讓を以てす故も
 争ふ所ありし夫の才
 能を争ひ功業を争
 ひ權力を争ひ意氣
 を争ふ皆小人の爲
 す所禮讓の道に非
 ず且禍を取るの道
 あり

◎蘇轍曰く 道義
 心肝を貫き忠義骨
 髓を填む須らく死
 生の間も談笑をべ
 し

氣てをかしいではありませんか……
 右述まする様の形態でありますから、兎角喧嘩沙汰
 が多くありまして、それも部落々々の内輪ばかりで
 とありません、ヤレ彼の桃の樹を自己達の村の所有で
 あるのよ果實を取たとか、又此鹿は自己の村の者が逐
 ふたのが汝の村内よ這入ったのだから自己の村の所有
 だとか、何とか彼とかいって各自の慾を遂げやうとす
 る結果が、竟り争鬭とありまして、ソレ權兵衛も出い
 八兵衛も来いと此村で人數を築めれば、彼村でもまた
 村中に徇れて人を繰出すといふ様に、棒であらうが刃
 器であらうが不束ながらそれ相應の得物を振まわして
 斬り合ひ撃合をする事が出来る、これが即今で言ふ戦
 争で、そもく此れが戦争の濫觴だと申します、戦争

◎ユリエン曰く
 不直の所爲を行ふ
 たる者のみ悪とす
 べからず之を行ふ
 の意あるものも亦
 悪とせべし

◎孔子曰く 身体
 髮膚之を父母よ受
 く敢て毀傷せざる
 と孝の始めあり

◎ヒウム曰く 惡
 事と許多の器具を
 有せり而して虚言

と申せば——諸君御承知のとほり——昔時あらば弓矢
 即ち飛道具よ、鎗薙刀をこじめ刀おぞを以て撃あひ、
 今でと大砲小銃おぞと怖ろしい道具を使ふて勝負を争
 ふとでありまするが、若し此様の事が何時でも何時で
 も絶ぬぬやうでありましたらば、其中よ生活して居る
 人々の不幸不運と何れ程でありましたらう、人々を皆味
 方よ勝利を獲たいと思ふて戦ふては、情なくも敵の刃
 よ命を棄て、しまい、用ふ人もあき戰場よ屍を曝し怨
 を残すのみか、其人には亦親もあり兄弟もあり、随分
 妻子もありましたらうから、跡よ残った此等の人々の悲
 しみ嘆きは如何ばかりで御座りませう、實よ申すも
 涙の種であります、シテ又此れが地震とか洪水とか人
 の方で止めるとの出来かい天災地妖で死別れをせねば

と云ふもの何れの器具も能く相應する相柄あり

◎社會の制裁

◎ゾアツクル曰く

疑感の心情と社會改良の爲めは必要なる先導者あり

◎子華子曰く 誰

か其所以をして然らしめしぞ其然るゝ因てあり然るゝ然るとせしや然ら

あらぬのちらも兎も角も——それでさへ見聞する度よ肌生粟とそる位でありますものを——故意々々此様の凶事を我から造り出して、我か穴は陥り、そして怨を此世に殘し、又愁嘆を後と與へる様の事を爲ねばならぬと云ふ道理が何處にありませしやう、戦争も出れ生別れとか申して日本では水杯をしたと云ふのです、其時の親の心子の心妻や兄弟の心が想ひやられて怒然であります、諸君とナント此様の事を聞て何様な感覚もお成りあされますか、又永久までも此様の情ない状態で續いて好いものと思召しますか、必ず身を顛はして——ド——もさういふ事と嫌ひだ、其様の世で困るとおツしやるゝ相違ない、シテ見ると此れはと何か好工夫をして成るだけ嫌ひだ困る様の事のない

ざるを然りとせしや吾れ亦其然る所以を知らず夫れ是れ之を萬物の原と謂ふ

◎天真子曰く 夫

れ社會と且つ長じ且つ學ぶ故に古と今と及ぶす今と後に及ぶす是を以て先覺を後覺とし後覺を先覺とす

やうゝ爲ねばありませンが、儲さうあると諸君や私共とひどい弱虫で戦争も何も出来る奴でない、彼人等と物を掠られやうが、頭を叩かれやうが、又唾を吹かけられやうが、決して抵抗する人でない、實は生心なした、馬鹿野郎だと他人は嗤はれるであらふと思召す方もありませしやうがそれが、即ち工夫のしどころで——此く申す私共とても他人は悪ひ事を仕かけられたり、恥辱をか、せられたりするやうで、唯ハイ々々アイヤ々と黙ッて斗り居る譯にと參りませン、必き自分の毀譽にあらぬやう、身體に傷のつかぬ様と心を据ゑ身を構へるゝ相違ない、先方が手を揚れた此方も其手を避ける様よし、場合に依ては此方から先方の人を殴り倒し、又と捻伏せることもありませしやうが、此うし

た斗りて先方が固より悪人のとですから何時までも
 争闘が果てるとでない、互に意地を持つこととあつて、
 道路を歩くも其人々を遭ひはせぬか、殴られはせぬ
 かと、少しも安心せる事が出来なればかりでなく、究
 竟何方か大傷をそるか、若し又生命を失ふ様の事が
 ないとも限らず、實に双方共つまらぬ事にゐるので、
 此れ亦大に不幸と申さねばなりません、假又此様の事
 と打棄た處で、此う争闘の爲はうだい、腕力の剛みは
 うだいとあつた分よと、前も申した理と非とが判ら
 なくあつて仕舞うて、善と悪とが滅茶苦茶もあり、隨
 て善人でも弱ければ輸悪人でも強ければ贏とあると自
 然の勢で、終よと強くさへあれば誰でも彼でも倒し廻
 り、他人の所有と我の所有と標準が付て仕舞うと相違

ないのら、あかく、以て打棄て置く譯もゆかない、シ
 テ見ると我々が弱いからと云ふて之れを止める工夫を
 爲るのでなく、畢竟と世間の善人であらうが悪人
 であらふが、弱い者であらふが、強い者であらふが、
 悉皆の人々の爲め、全牀の世の中の爲めは思案ををし
 、工夫を凝すのであります、即ち卑怯をこころではなく
 て、すばらしい仁慈の沙汰であります、ソコで諸君何
 ンか工夫を致したらば、人々が幸福で生活すことが出来
 ましやうか、詳しく申せば、安心で、面白くて、そして
 楽しい月日を送ることが出来ましやうか、直に次回の演
 題も移つて論じると致しましやう

第三回 道德の制裁

諸君、道德と申すもの之何でありましやうか——今少

◎ヘーゲル曰く
 世は悪人の存する
 は其の悪あるが故
 又非ず悪人と雖も
 幾分か善ある所あ
 るに因れり世は偽
 者の存するは其の
 偽あるが爲めに非
 らず偽者と雖も幾
 分か真ある所ある
 又因れり全く不善
 ある者全く眞實あ
 る世に存することを

しく此事を述べて置いて前回も續けると致しましやう
 が……凡そ人として心と云ふものを持たないものと
 ありませぬ、シテ其心と云ふものと良いものでありま
 しやうか、又不良いものでありましやうか——之れよ
 と種々と混入たお話がありまするが、離々しくあつて
 は好くさいから、簡短なお話し申せを——譬へば此處
 一人の人がありまど、此人は矢張心と云ふ大切をも
 のを持って来て居りまど、然るに此人は何故か大變な貧
 乏致して食べると困るやうなあつて居るが、トいつ
 て誰も食べると云ふて食物を與へるものもさい、スル
 ト漸々餓餓くあつて如何にも何か欲しくありました處
 、不圖目よつきましたのと某家の圃ある桃の樹の房
 々々とあつて居る桃の實であります、いかよも甘味さう

得ず
 ◎ピール曰く
 吾人と無智として
 屢々己れの害と爲
 る物を求めんとす
 然るに幸として智
 識圓滿ある天帝我
 等の爲めよ之を拒
 みて與へざるあり
 以て纔に其害を免
 かる
 ◎ハルベルド曰く
 我が口より出づる

でありますから、ア、食べたいと思ふとド——よも堪
 られなくなりました、サ——此時の其人の心之如何であ
 りましやう、此桃の樹他人の所有であるといふとは
 能く知て居ります、すれを此れを取れば人の所有物を
 盗むと云ふ當るといふとも自分又了解して居るに相違あ
 り、シテ又人の所有物を盗んで好いものであるか、
 悪いものであるかど聞きましたらば、其人と好いと答
 へましやうか、悪いと答へましやうか、諸君之を何
 どお答へおされまするか、必ず悪いとおっしゃるであ
 りましやうか、其餓餓い人も亦全く悪いとであると
 答へるに相違ありません、シテ其悪いといふことを知り
 まするは何でありますか、此れが即ち心でありますして
 人の心といふものは決して虚言詐語を言ふものであ

所の悪く復た我が胸中よ落ち入る
 ◎スレノザ曰く
 凡そ我が憎む所の者全く滅亡し若くは壊敗するを見聞するときと吾人自ら喜悅する所のものあり然れども此喜悅たる純然のもの又非らずして其の中必ず幾分か悲哀を含まざる莫

りませんから、誰教へずとも善い事と悪い事はよく知て居りまする、依て此れを良心と稱へて「良い心」と申しまするが、今一つ例へて申さむ、此處よく虚言を吐く人があります、此人は何よでも虚偽詐欺を言ひまそるけれども、依然自分の心の中よと眞實の事を言て居るとは思ひませんで、自己は嘘を言て居る眞實の事でありと言ふとをイヤンと心得て居ります、此れが即ち心といふものと良い証據で、若し心が不良いものでありましたならむ、嘘を語て居るといふとが判りもせぬを、盗むといふと悪い事だぞといふとが知れる筈があります、それを何處までも心と良いものでありまして、此れが即ち前掲げました道徳の本源とあるのであります

し然る所以のもの
 と何ぞ我が憎む所の者も亦人類あるを以て固より我れと其情を同うするもの、在る有れを我れ今其哀む可きの境界に在るを見るときと我れも亦自ら悲哀の情を發する無き事能とせずして我れの情懸の情頓かよ消散する

此く述ますれと、諸君と「道徳之心から出るものであつて心と道徳のお師匠様即ち磁石の針であるといふと」を少しく御台點をされたのでありませしやう、眞又其通であります既又申上た如く、心が能く善い事悪い事を分別まするからと、其心が善い事だと教へる事は遠慮なく行つて宜しいが、悪いと教へた事と微塵も爲さぬ、と身を持って往くのが道徳でありまして、約めて言と、悪い事を決して爲すに、善い事をかりを行ふのであります、其故よ此道徳といふ立派な往路を渡つてさへ參れど、決して自身に罪がないのみではありません、自分の心に恥ぢたり、氣よ澄まぬやうの事はないので御座ります——序でござりまするからおはさし申しまするが——この「心よ恥る、氣よ澄ぬ」と云ふこと

よ至る可し

◎ナポレオン一世

曰く 徳行の力は

身體の力より十倍す

◎ハーベルド曰く

一個善良の母より

百人の學校教師より

値る母の家裡に在

るや家中衆兒の心

を引くの磁石あり

又諸大人の眼目を

引く磁石あり家人

母を學ぶこと一年

一昧何の事であるかといへば、只今述べました通り心が良きものであつて、此れと悪いと教へて居りましても、其時又怒りか何と申す悪い奴が手傳つて、悪い不善と知りながら行ふとがある、スルト此人の心の指教は背いて居るから、我とわが心は向て恥ぢねばなりません、又我とわが氣は咎めて胸中が汚れますから氣は澄まぬのであります、又此他は良心を欺くといふとを申しますが、これも今申上たやうの事で、全昧人の口と心の鏡と申して、心が痛いと思へば口は痛いと云ひ、心が白いと思へば口に白いと言ふのが當然でありますものを夫の虚言を語る人あざと、良心をあざい事を口に出して人を欺すのでありますから、取不直我と我心を欺くので御座ります

三百六十五日、一

日二十四時開始

を常に絶ゆる事を

し

◎洪自誠曰く 君

子罪を昭々し得る

とききを欲せば先

づ罪を冥々し得る

と勿れ

◎李邦猷曰く 自

ら重んぜざる者

辱を取り自ら畏れ

ざる者之禍を招き

此の如く人々が各自に持つて居る良心と云ふものが道徳と云ふ大切の徑路、即ち人々が渡らねをあらぬ天下の大道を示し教へるとが了解しましたならば、人々は皆道徳心即ち世を渡る道は如何であると云ふ心を以て居るとも了解せしやう、すれば人の所有品と掠めてこあらぬとか、我心で悪いと知りつ、他人を打擲したり、恥しめたりするとはあらぬといふ一つの制裁が、人の行為の上より自然と出来てあるのです、平易く申せば彼人が持つて居る皮の好いから、自己の方より取てやりましやうと思ふた處が、良心が「それと悪い不可へ、欲しければ相談づく、得心づくで貰へ」と指圖をすれば之に従ふのが、良心の制裁であつて、何事よりも悪いとは爲られぬ、善い事ばかりを爲よと吩咐るから、「取る、掠る」

自ら満たざる者と
 益を受け自ら是と
 せざる者と博く聞
 く吉凶悔吝天より
 自然れども己れよ
 由らざるもの
 ◎同氏曰く、善を
 爲すと易く善を爲
 すの名を避くると
 難し人を犯かさ
 ると易く犯かして
 校らざるを難し
 ◎同氏曰く、能く

とする手足の行爲が制へられて、怨といふ悪い奴が殺されるのである、此れが即ち本題に掲げました「道徳の制裁」又は「良心の刺激」と申すもので御座いざして、人々よと第一番よあくてあらぬ大事のものでありませす
 諸君、是で道徳の制裁といふとも概略御了解ありましたで御座いざしやうが、假りにも此の道徳の制裁がありまして、人々の行爲よ目を附けて居りませるからよと、前々お話申したやうな情ない世界、粗暴な舉動あざは、まるで無い譯でありさうなものですけれども、此れがあかく、其様ばかりよと参りません、成程何程野蠻である未開と申した處が、全じく良心といふ者がありませる限りと道徳心もありまして、他人の所有

自ら愛する者未だ
 必ずしも能く人を
 成さず自ら欺く必
 ず人を問みず自ら
 儉ある者未だ必ず
 しも能く人よ周か
 らず自ら恣まゝに
 する者よ必ず人を
 害す此れ他なし善
 を爲す難く惡を爲
 と易ければあり

品を取られぬ、人間と生たからに各自働いて各自の命を維がねばならぬといふ様な心があいでとありませしければ何れも何を申すも道具建が具とつて居りませぬ、至て不自由な世でありませすから、誰も彼も其様の志操で居て呉れる譯に往きません、道具建と言へば恰是現今の世がチヤンと限界區別がついて居るやうに、何でも不自由のあい様に揃つて居るのを申すのでありまして、此結構な世の中でさへ悪人が多いのでそのものを、何うして野蠻の世界未開時代よ悪人があいと申されまうしや
 此く述べるに諸君よか疑ひあされませしやう、辨士と何うも了らぬ事を言ふ、折角道徳の制裁といふ好いものを見つけ出して、幸福の世よしやうと考へながら、と

うやら頼りよあらぬ、宛よあらぬ事の様も聞へるが、
 一昧何を言ふて居る事やらとお話し申さねをあらぬ處で
 しゃうが、其處がこれからお話し申さねをあらぬ處で
 ありますので、諸君が「便りよあらぬ、宛よあらぬ」と
 お話しやる道德の制裁と、チト宛よとあり難い又頼り
 にあらぬ氣味が在いでもありません、否最も宛にあり
 ません、頼りよありません、辨士はよく其事を承知し
 て居るので御座りまするが、それよ此席へ擔ぎ出した
 といふと如何いふ事由かと問へる、あか／＼淺い考へ
 から出たのでとあります、それよは至て深い心得が
 ありての事でありますから、今少し其次第を述べて他
 の題よ移ると致し申しやう、
 然らば何故に此宛よあらぬ、頼りない「道德の制裁」もど

と言ふものを、幸福を世よする工夫の一つよ敷へたか
 といふ事由をお話し申しまするに、先づ此「道德の制
 裁」と云ふものが、何故あてよあらぬ、頼りよあらぬか
 といふ事を述べねばなりません、ソコデ道德といふも
 のよ其様の脆弱いものであるかと質せば、あか／＼左
 様の危険いものでと在いので、此れ斗りは千歳萬年の
 後よも碎しなくして仕舞うとの出来ぬものであるのよ
 、薄ッペナイ紙よあんな様のよ、人の行爲の制裁と鬼
 も角、漬物の押も間似合さうも在いと、何といふ
 ことであらふと、不審尤では御座りまする、ガしかし
 、其れよ一應の考へでありまして、勿論道德といふも
 のは強く硬いのですけれども、それの使用方が弱い
 であります、前にも申上ね通り道德を持て居る良心

が「彼事は善いから爲上此れと悪いから爲る」と指圖を致した處で、其指圖は間違のき強い指圖ですけれども、指圖を受けた人が、エー、ま、よ、善いと相違をいけれども、身體が切ないから止せよとか、悪いと知れて居るけれども、ドーも欲しいから盗んでやれ、とか言ふて指圖通ふ爲きいからとて、自身で自分の良心の指圖を背くばかりの事ですから、靦面又罰があるのを僥倖として、悪い事を働くことが澤山ある——尤も現今の世で法律があつて悪い事を働く者は罪に依て罰がありますけれども、只今お話し申すのと、まだく其様のもの、出来ぬ時の事を言ふのですから、何事もまだ無い積でなければ解り難うござりますよ——シテ觀れば若し此良心の指圖する道徳を背いた

らと、此程の罰が當るとか、此々の報があるとかいふ怖い事がありましたから、即ち道徳は確乎とした尻の押手があつたから、随分道徳の制裁が利いて、世の中の漬物が甘く漬りましたやうが、何分も其尻押があつてと、充分な効能があるもので、前にも述べ通り、此れは道徳の悪いのでとあつて、使用方の悪いのであると言ふと違ひありません、すれば辨士が爰に要りませぬ道徳を持込んだのか、又は必要なのでつき出しかと、自づと解つて來も致しましたやうが、更だ判明と述べて置て、それから進んで題を更へると致します諸君、辨士は更に道徳あるものが世を幸福よそる工夫の一ツ處で、其第一番のものであるといふ事を説きまじやうが、最早六ヶしい事を駈べ立てるに及び

ません只今述べました如く、道徳は尻押しへあれを充
 分な效能がある、即使用方よ依るものであるといふ事
 が究まりましたからに、假令他から手傳がなければ
 ならぬとした處が、決して道徳の光は消るわけあり
 ません、又道徳の強い硬いのが軟かく化する筈ありま
 せんから、辨士は此世を幸福にするにこそ此道徳を根
 致しまして今一つ好いものを造りたいと思ひます、
 此が即無用のお饒舌を爲す譯で、道徳を持つて來る
 れば此演説が出來ない証據、否世が幸福ならぬので
 あります、ソコで次に直ぐ道徳から造り出すものを
 問題として掲げ其造り方から何から何まで申上ると
 いたします、
 終りに臨んで一言を費しまするのは道徳の基本と確

良心であるか否やであります、此れも就てはあか
 く一應の議論を以て悉すことの出來ぬ困難があつて
 、如何に完全な良心として必ずしも道徳の基本とあり得
 るとも言ひ難い場合もありませんが、其れと後又倫理と
 言ふ題を講じる時又譲ると致しますから、此處よと
 唯世の進む状態をお話し申す爲め又援引したと御承
 知あされて、後又説く所と相違する點及び爲し得べか
 らざる斷言をした段と幾重も御容赦を願はねばあり
 ません

第四回 社會の制裁 附法律的の制裁

◎ソクラテス曰く
 徳行を崇めれば必
 らず快樂と利益と
 隨從せざるを得ず

諸君、辨士と前回又道徳の制裁といふとを述べて、此
 道徳の制裁が巧く使用とあいと效能の少いとを申上
 げました、その效能を見せるには本題として掲げま

◎孟子曰く 人よ
 四端あり惻隱、羞
 惡、辭讓、是非、
 ◎同日く 惻隱の
 心と仁の端あり羞
 惡の心と義の端あ
 り辭讓の心と禮の
 端あり是非の心と
 智の端あり
 ◎鮑昭曰く 影表
 に従ひ瑞德も従ふ
 ◎聖書に曰く 己
 れの欲する之所を

した「社會の制裁」と言ふものを持へねをあらぬと存じま
 して、そろく〜とお話し申たふ御座りませ、却説社會
 と申すもの何でありますか、社會と即ち我々が斯う
 して寄集つて國を爲して居るを指す詞でありまして
 、詳しくお話しをすれば余程難かしくて、急いでお話
 をしたからとて余りお利益もありませんから、漸次
 とお了解あるやう、序で々に説分けるに致しまし
 て、爰でと假し「世間」又「世の中」をどの訓で置ましや
 う、シテ「社會の制裁」とは「世の中」又「世間の制裁」で平
 易く申さば、斯う大勢集まつて一つの國あり、又と未
 開時代の邑ありを造つてから、皆々が一同に相談する
 あり、又と數人よ任せるありして世を幸福に送らうと
 するに付て出来る所の制裁を申すのであります、即ち

人よ施せ
 ◎孔子曰く 己れ
 の欲せざる所人よ
 施す勿れ
 ◎ベーン曰く 人
 の行爲は關する教
 育は主として刑罰
 より成る假りよ若
 し刑罰の力を除き
 去らむ往育の用よ
 供すべき器具と一
 もなし
 ◎孔子曰く 不義

此前は述べたの各各自の心で各自の行爲を制へるのであ
 りまして、此度のは各自勝手よ自身の行爲よ目を付け
 るでとド〜も面白くないからと言つて、多數の人が惣
 集で多數の人の行爲を監視しやうとさつたのでありま
 す
 ソコテ諸君に今一度繰返して申上ねばならぬのは、彼
 の野蠻世界、未開時代の事でありませるが、兎角此時
 分よと争闘が多くて粗暴の事ばかりを爲る事由は、以
 前申上ましたので御了解よあつて居りませしやうが、
 さらむとて一概に此様の人をかりである、又此様の邑
 をかりであると究つて居るのでありません、随分道
 理を辨へて居て、親に孝行を盡し、長上の人又と兄弟
 を敬ひ愛しみ、妻子よ慈愛をかけあせして、人々よ親

よして富且つ貴きと我れに於て浮雲の如し

◎ステール曰く

人の人たるを得る所以のもの心あるを以てあり

◎孔子曰く 吾か

道と一以て之を貫く

◎曾子曰く 夫子

の道と忠恕のみ

◎中庸曰く 忠

切をつくした人もありもすれど、至て優しい邑もありましたのですから、此等の人々で觀れば、能く道徳の制裁を守つてゆきたものに相違ありませんが、何故一昧が粗暴いと言ふかと申せど、一人でも二人でも、又一邑でも二邑でも、少しく悪い人々があつて、良心の指圖に従はず乱暴を働くものがありますと云ふと、前も申たやう又其乱暴を禦ぐとせねをあらぬのが、抑もの始まりで、終つて優しい人までが粗暴な風もあるやうな事とあつて来る、これが實情の處からして、長々と世の中を幸福にする工夫をお話しようとでありまするが、此工夫は何も辨士が爲るのでありませんで、矢張此粗暴な人々の中生活して居た人々が爲たのを、辨士が一々事物の道理を照して申上るの

恕道と達する遠からず

◎格言曰く 幸

運と勞苦の人を責む

◎格言曰く 勞

苦と五分の才能ある人を増して十分の才能あらしむるものあり

◎同上 人若し一

詐欺を行つて廿の詐偽を造りて以て

でありまするから、旁々御注意を願はねばなりません却説本題と立戻りまして、道徳の制裁で、ドも人々の行爲の上と効能が少いと云ふところから、充分に利くのが社會の制裁だと考へ付たのと、一昧何ういふ事由かと釋ねまするに、人々が善い悪いと云ふ事と承知して居ながら、兎角善い事を爲さず、悪い事をするのも、全くお心任せ、あさり次第と打捨て置くからして、腕力さへ強ければ何の怖いところがあるものかと、勝手隨意を振舞うのであるから、此れを止めるには邑中の者が心を協せて撥付したり、強い目に遭せて遣るが好からうと云ふ處から出たので、此他モ一つ甘い術がありまするが、序ながらザツと申しますれば、彼のお宗旨の力で怖がらせ又は楽しませて悪行を止め善行を奨めるので

其破綻を緝補せざるを得ず

◎同上 定業ある

人之僅かゝ一の悪

魔を誘ふる、も懶

惰ある人と一千の

悪魔を苦しめらる

ゝものあり

◎同上 人と常々

悪魔を誘はるれば

懶惰の人と専心魔

界を沈溺す

◎キングスレー曰

ありまして、佛法では未來として死んでから後の罰を説いて悪い事をせぬ様を論し、耶穌教では善い事をした人は死んでから天へ昇つて安樂な生活をする事が出来る。と勧めるやうな、阿彌陀様と言ひ天帝と言ひ、地獄極樂と言ひ天上と言ふ相違はありまするけれども、要は神様あり佛様ありと畏ませて、悪い事を懲らし善い事を勧める方法で、此れも随分よく利くものでござります、ガシカシ此方は此邊で止めて置まして、何分よも悪いとを爲られては善い人が側で迷惑する而已であらう、又當人もつまりは爲が好くないのであるからといふので、悪い事をする人を懲すとは定りました。其懲し方は何様したら好いかと申せむ、これは先づ懲罰といふて懲しめの爲に罰則を設けるが第一であります

く 幸福の秘訣と

智識あり

◎格言曰く 詐

欺と正理とを並存

するとおし

◎孔子曰く 君子

は三の懼れあり天

命を懼れ大人を懼

れ聖人の言を懼れ

る小人と天命を知

らずして懼れず大

人に狎れ聖人の言

を悔る

、恰是諸君が日々御出あされる學校でも、若し他人の邪魔をしたり、故なく他人を殴いたり傷をつけたり致せば、直と品行點を減かれたり又は退出時限に留置かれたりするやうな、それ／＼の罰があるのと同じ事であらう。例へて人の所有物を盗んだらば箇様々々の罰がある、又他人を創傷をつけたらば箇様の罰、若し又他人を殺したらば此様といふ工合なそれ／＼の罪に依て罰をあてるのであります、然らむ此罰をあてるには何様したらば可らう、ソ—一度々々多數の人々が手を掛けてする様では困るといふ難題が起るゝ相違ない、ソコで辨士は今其當時の決議を道理の上から推測り且其當時の一般の狀態から想像致しなると、前も一寸申上りました様は何程粗暴の世でも未開時代でも又それ相應

◎格言よ曰く 何人も自己の悪事よ由りて利益を得ると能はず

◎ミル曰く 已れの方のみを知る人と畢竟知らざる人あり

◎ペーコン曰く 世人富と力との二者を能く理解する者少し故に富を以て力より重きも

み人々の頭領とあつてゆく者があつたに違ひない、シテ其人は何様な風で頭領とあつたか申せば、今日開けた世界で豪強い人が頭領とあるのも全に道理で何も異つたところはありませぬ、即ち開けぬ時分を先づ人々又慈悲深くて充分人を懐ける丈の伎量があつて、そして腕力が強くて人を怖がらせ畏ませるとの出来るといふた様の人頭領とあつたのでありませう、又モ一つ又は系統門閥の正しくて代々頭領とあつて居たのもありませぬが、此れとても矢張其先祖が今申した様の豪強い人であつたからであります、ソコデ此頭領とも呼ぶべき人があつたとして観れば——尤もあければよい様の趣向もつけまするが、假にあつたとして——此頭領とあつて居る人が言ふと爲すとは随分行

のと思へり其實と然らず自己の力よ依頼し自ら節檢を守り此二者實よ人をして自己の井水を飲み自己の麵包を喫せしめ人をして職事を學習し及び其當さよ爲すべき善事を行はしむべし

ひ遂げられるでありませしやうから、頭領の人と爲りが良くて假も人々の上と立つ丈のとは爲ねばならぬものだといふ仁慈の心が其人とありましたからと、何もさう皆の者で氣を揉ますとも好いとで、他の人々又害を興へる悪人があると観れば直に捕へて罰をあてても致しませしやうし、又悪人よ責められて困る様の人よと憐愍を加へて助けもしませしやうが、しかし此とても頭領の思ふ次第ですから随分依怙偏頗の沙汰がよいとは限りませぬ、依て辨士と今一つの頭領も何もよい方でお話しを致しませしやうが、若し善を慰り惡を卻けると云ふ頭領がよいとあるか、假又あつたところが到底人々を懐け畏ませるだけの勢力がよいと云ふものか、性質が、悪人であるから善人の爲めよとあらぬといふ様の

よ於ける報酬あり
 ◎ユルリール曰く
 道理と良心との命
 命を行ひ遂るは剛
 勇あり天下豈之よ
 り貴きものあらん
 や人性と具はれる
 首榮及び地位を保
 守するに剛勇あり
 天下豈之れより貴
 きものあらんや寧
 そ貧賤病苦及死亡
 を甘受すとも苟且

人であつて、無いのも全然だともある世もありまして
 と、第一着より起るのが善人の集會であります「ナント隣
 家の権兵衛さん、ドーも此様又我々をかり迷惑の事を
 爲れては困るでとありませんか、今日も今日とて例の
 横造奴が参つて、遣らぬと言ふものを無理やり引扱
 っして仕舞うて、トードー雞を一羽持てゆかれました」
 と云ふと「權」イヤもう困つたので御座りますので、私等
 の家でも此間中から、悪太郎だの情助だのが交互にヤ
 ッて来て、手當り放題物品を持って往て、揚句の態に
 と御馳走をして饗應せよと、掻出して、それを爲ねを
 殺すとか、小屋を焚くとか脅迫するのですから、お蔭で
 私「ヤー此れ、此通に大變又大形い瘤を貰ひやしたのサ
 太郎「ハ、ハ、ア、それは眞にお氣の毒で御座りますナ

ある所業を爲し良
 心に辜負して罪惡
 に入らざると至強
 なる者にあらずし
 て能くせんや適宜
 の行爲と堅定の志
 操とを以て種々の
 禍患と耐ゆること
 と登高爵大位より
 も貴からずや
 ◎伊藤一齋曰く
 志を立つるの功と
 耻を知るを以て第

「ヤー々々此はく大した瘤で、フンお毆られおすつた
 ので、痛さうな、此う瘤だらけでと権兵衛さんであうて
 全で瘤兵衛さんでござすのう、ワハ、ハ、マ、その様
 の申戯は措て、ナント瘤兵衛さん些と好思案もありさ
 うなものですかア、又此節とあかく安心して寝ると
 が出来ぬやうで、昨夕あたりも門前又刈て置た麥がサ
 ッパリ無くありました、麥又滅多と脚の生へるとも
 あからうから、誰か盗んだので御座りませしやうてあ
 、權「ソリヤ、もう些とも油断とありませんぞ、兎角彼
 奴等は稼ぐとが嫌ひで、懐手をして居て温まる様のと
 而已考へて爲るのですから、私もあんなまり腹が立って
 溜らんで、今度と何か復讐をしてやらうと思ふけれど
 も、何を言ふも腕力や人を斫る手の利かぬので、此

一とす

○中庸又曰く 耻を知るは勇に近し

○孟子曰く 仁の不仁に勝つは猶水の火に勝つが如し

○同日く 萬物皆我れに備ふる身よ

反して誠を自ら樂焉れより大なるはなし

ればッかりが口惜しうて、口惜涙が溢れますわい、チ
 ーッくく太「イヤ癩兵衛さんの泣きあさるのも無理
 のない事で、私等も口惜しいのと全じとだから、マ
 々々其様も氣を落さずとも、チーッよ、彼の向ふ町
 の慈悲藏さんは一寸方も強し、それよかかくの親切
 者だから、如何だ、是から打連て相談に往ふじやあり
 ませんか、サ！起ッしやれ癩兵衛さんイヤ權兵衛さん
 と二人で慈悲藏の許へ往て話すと、慈悲藏も元より
 惡黨原を惡ンで居りますとであるから、だんく相
 談をして自分が大將とあるか又と自分より強い人を大
 將とするかして、徐々惡黨の征伐をこじめるとある
 、此うして漸次と善人組が勢がよくあつて惡人の力が
 薄くあると、ソコで邑中あり國中の總集會が始まつて

、何分も多數のとであるから悪い事をする人も多い
 から、爾今其取締をするよと誰か毅然とした方をお頼
 み申して取締をして貰ひたいものだと言ふ相談が出来
 る、スルト誰某と察強くて人を懐けるとも出来、又怖
 からせもして能く命令が利くから頭領に爲つて貰ひた
 い、慈悲藏殿と種々心盡して下さつたから、一つ
 惡人輩の檢非をお願ひ申さうとあつて来て、サ！此時
 にこそ前に申した罰則の定まるのでありまして、一懸
 から申すと、人々が悉皆集まつて盗みの罪と此様々々
 、人殺しと斯様々々と會議をして制定るのが至當であ
 りませければとも、さう恰削の人ばかりとありませず、
 且其時代の人ですから大して權利だの自由だのと思ひ
 もせず、兎角法律と言ふものど何様して調へるものと

も心付きませぬから、其點と頭領あり檢非殿で宜い様
 よお頼み申すとあるのが多いから、大概は頭領が勝手
 氣随ふ罰を與へたのであります、シテ觀ると頭領の胸
 中が取不直罰則であつて、其胸中がチヤンと規矩準細
 をあてた様よ寸分歪のあいものであつて至極充分何
 一つ點の打處があいと申されませぬ、けれども諸君
 、物事の始まりといふものと申されませぬ、けれども諸君
 して、考へて見れば今日の法律だとか、規則だとか申
 そ立派のものも、全く此様のお粗末を事から進みく
 て出来たものであるかと思へば、實に驚く斗りではあ
 りませぬか
 諸君、此く述べ來りましたならば本題よ掲げましたる
 「社會の制裁」と言ふものと何様のものであるとのお疑ひ

之釋けましたで御座りませしやうから、今辨士が之を數
 言に約めてお話し申してもよく御解釋をさると存じ
 ます、テ更ふ社會の制裁と申せば、我々人間が相共
 よ一國の中より一邑あり又生活して居る上の世間交際
 から爲てはあらぬ、爲れば斯様するぞと制裁を置かれ
 るのを呼ぶのでありまして、此れが即ち法律とあつて
 來るので、世が開けて萬事爲る事の品種が多くあるよ
 隨て、此制裁も漸次種類が殖ねて參り、あかく殺人
 罪や盜罪をかりを罰するばかりでと濟まぬこととあり
 まするが、詳細の事と後又法律と云ふ題を掲げてお話
 し申しませしやう
 右よて社會の制裁あるものが如何あるものであるかと
 いふことと概畧御了解にかりましたで御座りませしやうが

、茲にかたぐひを断り申して置のて著者が述べまする
 社會の制裁と申すものと二個の區分があると云とで
 御座ります、仍で其區別はと問へば、通常之を社會的
 の制裁と法律的の制裁と稱へて、前者と法律の力を以
 てせずとも人々の惡き行爲を社會と擯付して後指を指
 し自然別物の様も扱ふから其當人も此れを制裁されて
 大に其行爲を慎しむといふとを云ひ、後者と立派な法
 律があつて人々の惡行を止るのを申します、故に此二
 個を一層解り易く申せむ、社會的の制裁と別法律
 での責ぬ事も人々の擯付に依て惡行を制へるとあり
 まするが、法律的の制裁と法律の明文を以て是非共如
 斯せよと言ひ、又は如斯されねばならぬと言ふて人々
 の惡行を懲す上から起る所の制裁であつて、社會的の

制裁と之を以て道德の制裁と次で起るもの即道德を以
 て制へると法律を以て制へるとの中間であると思は
 い誤りありませぬ、然かるも著者が茲に只社會の制
 裁として社會的の制裁と法律的の制裁との區別を立
 かつたのと、此二者と表面上分ち得るものでこそあれ
 矢張本回に述べた人々が人々の行爲を監視するのであ
 るから、同じく社會が制裁するといふに外ないからで
 ありまして、今若し法律あるものでも社會があつてこ
 そ行はれもすれ、社會をもし存在するものでもありま
 せんから、究竟社會の制裁と申さねばありますまい、
 聊か述べて諸君に御断り申して置くので御座ります
 から、詳しい事と二篇を御覽なされた上で充分に御合
 點なされたう存じませ

第五回 人類の幸福

◎ソクラテス曰く
徳行と利益と其性
和合す二者を分離
せんとすると妄お
り

◎同日く 真正の
幸福は外部の受領
より生ずるものよ
めらず道德の智識
と道德の慣習とよ
り生ずるものあり
◎マシヨン曰く
勉強して榮譽を致

諸君、著者と前回に於て、世の中は如何様のものではあると云ふ事を辨するに先づ我々の先祖の時代の事を想像したり探究したりして如何ある變遷を経て今日の様にあつたかといふ事を調べねをあらぬと申して、野蠻世界未開時代の概略から道德があつて人の行爲の上へ制裁を置くと、及び道德の制裁でも何分にも人々が善い事をかかをして相互に幸福を生活す事が覺束をいから、社會の制裁といふものを以て人々の安心に生活せる様、幸福を全ふし得る様もあるとの順序を述べました、之を則ち我々が今日の様な道具建の揃つた世に生活すに成つた根本でありまして、お話しでこそ些少の間に出来たとのやうに聞へまするけれども、實

さんととるは高尚
の競あり苦し他人
の衰頹も乗して己
れを富貴にせんと
欲すると覬覦心を
り其社會を毒する
は懶惰に勝るこ
と一等あり

際の所でとるか、五年や十年の間も出来るとでないのではありません、尤も是れ世界中國々地方々々も依て早く進んだのと遅く進んだのとありまして一概には申さねぬが、其とても今日の人々も傳つて居ります時代までの年數を繰つて五百年目又は、此點まで進んで千年目又は此様でも申すだけのもので、人々も傳はらぬい時分即ち歴史を誌してある時代が何千年であつて、其間よと如何様の變遷があつたものか、おかく解つたとはありませぬから、只此書では是非此様をければあらぬ、此様あつたよ相違をいと思ふ所を道理の上から推測り、又は實際人々も傳つて居る事實に照らして述べたのでありますから、諸君も其お心得で現今の野蠻世界即ち亞弗利加邊の未開人種が如何様であるか、又は

現今彼の通り繁昌して居る亞米利加又歐羅巴からコロ
ンブスと云ふ大豪傑が行きましました頃とインヂヤン人即
ち亞米利加の土着人種が如何を風であつたかといふ事
を書物で御覽みあつたらむ、能くお覺りあさることが出
來るであらまじやう

却説此點までお話しをつめて見ると、世の中は人々が
悪い事を行はぬやう睦まじく親しみ暮して、争闘をせ
ず同士擧をしない様、簡短に言へば相互に噛み合ふぬ
やうになつてゆけば幸福は足りるものかと思召すか
も知れませんが、成程中好くしてゆけば幸福又は相違
ありませぬ、楽しいものと相違ありませぬけれども、人
の快樂と云ひ幸福又は高いと低いがありまして、例へ
ば推兒の快樂と慈母の乳房を啜へるのが最上でありま

するけれども、大人と又思ふまゝ、又力量を揮つて多數
の人の上に立つのが最上の快樂であると言ふやうに、
同じ大人でもとや車夫の快樂は十錢でも二十錢でも儲
けて來て、妻や子と膳を並べて鱈の一尾か二尾を肴
酒の一合も飲む位のとが最上でしやうけれども、人の
生活が上等なればある程快樂の標準が高いのと能く
知れて居るところであります、恰度其様も今日汽車や電信
があつて日本國中位と僅少の間も旅行をする事が出來
又は瞬く間も音信を通じることが出来る様の世の中と、
木の實を食て獸の皮をそのまゝ、着て居る世と如何程
其快樂と幸福とが違ひまじやう、此間もと餘程高いと
低いとの徑庭があるに相違ない、シテ觀る世の中全
身の幸福と言ふものもたゞく喧嘩さへあければ澤山

である、平穩であれを好いとのみと申されませぬ、然らば如何様の事が幸福であるかと申せば、先づ約めて言ふた處が、我々が相共に生活してゆくのも最も便利で萬事に不足の無いのが大した幸福に相違ない、シテ此便利で物事が足りるといふは至て僅かの言辭で御座りまするけれども、あかく、大きな事で御座りまして諸君が日々御用ひなさる物品をはじめ目に觸るもの耳に聞く事、ありとあらゆる物事が我々も便利と不足がないといふ事を具へて居るのであつて、若し一品一事でも無いものがあつたなら最早便利と足りるといふとを失ふのでありますから、世の中が如何に進んで来たとしてまだ、不足や不便利がないとは申されませぬ、近く例へれば彼の輕氣球です、即ち彼の風船あるもの

のが出来て、随分空中を飛行くことが出来するから、これで不足はなさ、うのものですけれども、又人に依つて、風船も好いが瓦斯があつてとあらぬ様では困る、瓦斯を製造へるは面倒だから、何か鳥をみた様を羽翼でも製造へて何も要らぬ空中を飛で行きたいと言ふかも知れませぬ、之を思ふと世の中に便利で不足がないと言へぬものでありますから、精々便利を様可及的不足の無い様にするとして置より外にありませぬ、スルト此精々便利で可及的不足の無いのが其時よ時の幸福でありますから、昔時の幸福が現今の幸福と大に違ふ事由も判つて参りませう、畢竟昔時から漸次に便利もあり不足の無いやうなつて、之してヤット今日の如くあつたのであるといふことが判

りまじやう、すれば此れが如何様も進んで来たかといふ事を考へて見るのも随分面白くて肝腎の事であると思ひますから、これから少しく御利益あるとばかりを解りよくお話し申しませう

依て此事をお話し申すは何から始めたらば好いかと考へまするよ、矢張り卑近の處から申さねをありませうから、先づズット巻首に述べました通り世の中は何の商賣河の職業として不用のものは無いといふ論から起つて来る「分業」と申す事、平易く言へば官吏もあり商人もあり職人もあれば農夫もあるといふ様も世の中の仕事をそれ／＼分けてすると、及び全に職人の中にも家屋を建てる職もあれを、壁を塗る職もあるやうに千種萬品と異つたをとして居る概略をお話し申すとして

左に其題を掲げます

第六回 人類分業の事及交換

諸君、前にも述べましたやうに未だ開けたい世もありまして、人々が生活しまするの食物は木の實や獸の肉や又と魚類を食ふ、即ち別段工夫をして造らずとも出来て居る取り易いもので済ませて置て、衣服も亦全じく獸の皮やら樹の皮木の葉などを少しく手を入れて間似合せて置く位でありましたから、萬事が凡て簡易であります、家を建ると申した處が眞の小屋掛をするのでそれから、其邊に生へて居る木の似合しいのを伐て来て柱とさし其上に草とか木の皮とかを載て雨露の漏らぬやうにして置く斗りの事で、とんと難かしいとが在いから、自分で自分の家を建るとが出来、随て煖

の道具とても餘り要りもせねど、假要るからとて極めて粗末なものですから、好加減に捏ねて置く位なもので、一駄の人が其様であるから、今日のやうなヤレ茶碗は陶器屋から買ふとか、膳は塗物屋で求めるとか云ふやうのこと夢にも見なかつたので御座りましやう、言は、家一軒宛が一つの天地一つの國のやうで、何でも彼でも自分の家に入用なものと各自自身で製へて済ましたのですが、ナント諸君、此様の状態で世が済むものでありましやうか、若し此様の牀裁で居ても不自由があいといふのあらを随分氣樂あつて御座りましやうが、世の中は決して此様の不完全なとて終るものであられませんから、第一よ起るのが物品の交換であります、それと如何様を事由でか問へば、假令家毎に各

自入用のものを整へると申しました處が、どの家もどの家も此通ふ出来てゆきて、餘りもせねを足りなくもあいと定まつて居る譯よと参りません、例へば此處の八兵衛と山へ往て獸を逐ふた處で鹿の二疋も獲て歸つたが、彼處の空兵衛は一日涉りまわつたけれども、兎一匹獲あかつたがあると、八兵衛の方へは皮や肉が剩つて居るけれども空兵衛の方では無いので困つて居るといふとが出来、スルト空兵衛は八兵衛の許から肉あり皮あり入用の物品を貰はねばならぬやうにあるから、自分の許に木の實でもあれを、其れを出して八兵衛の持つて居る物品即ち自分の入用の物と易へて貰うか、左もあければ今度獵のある時まで八兵衛から借りて置ねばならぬ、これが取不直交換と言ふものであつて

此方こちらもある物品モノを出して無いものを貰うたり、彼方あちらも有る物品モノを取て此方こちらも有るものを遣たりして、有あるのと無ないとで補おぎなひ合あふ意味いみであります、既すでに此交換このかへこといふ事ことが始はじまると取不直賣買とりまほうりかひといふとが出来たのでありまして、諸君は御存ごぞんじの通貨幣つうかへいといふものを以て品物を買うふのが賣買うりかひでありまするけれども、貨幣かへいがなければ賣買うりかひでないと申まされませぬ、假令貨幣かへいがあくても、此品このしやを幾許いくばくと其品そのしやを幾許いくばくと交換かへこをしやうと言いふたれを最早賣買まはやくが出来て居るので、品物モノと品物モノとで交換かへこをするか、物品モノと貨幣かへいとで交換かへこをするとの相違さういはありまするけれども、全おしく交換かへこよと違ちがひさいのですから、交換うりかひは賣買うりかひ、賣買うりかひと即すち交換かへこに違ちがひさいのであります故ゆに此様このようの區別くわくべつはしあくても、唯交換ただと申ませを賣買うりかひの事こと

であると思おもふて宜よろしい、デ此このの如ごとく交換かへこ即すち賣買うりかひといふとを、爲なはしめると、直すぐ此事このことが誰たれも彼かれも流行はやつて参まります、何故なぜおれを假令たど十軒じゅうけんでも二十軒にじゅうけんでも人々ひとびとが同じ處ところに住すんで居ゐりまするからは、彼方あちらにあるものと此方こちらもあし、此方こちらに有ある居ゐるものと彼方あちらにさいと申ます様ようあともありまするから、此これを巧うまく調理てうりして不自かへこ由ゆの少すくない様ようもするまは賣買うりかひ即すち交換かへこをするのが最も便べん利りであるからで御座ござり候ます、そふして此交換このかへこが盛さかんにありますると分業ぶんぎやうと云いふとが起おこりまする、即すち各自手各自てを分わけて仕事しごとをするまとが始はじまるので御座ござります、シテ此これと何故なぜかと申ますと、既すでに賣買うりかひといふとがありまるとからまは、何品なにしやでも人々ひとびとも入用いりやうな物モノでさへあれば賣うるとが出来できる即すち此方こちらに入用いりやうの他たの品しやと交換かへこをするまとが出来でき

來まするから、八兵衛が鳥や獸を捕へるとが上手であ
 れを、空兵衛は木を伐て指物をするのが上手だといふ
 風に、それく上手の道嗜好の業を以て糊口するところが
 出来るやうなある、即ち八兵衛と獵斗りをして其獲物
 を賣りさへすれば、何でも自分の入用の物品を調へる
 とが出来、空兵衛は木細工斗りをして其れを賣りさへ
 すれば、食物でも何でも買ふとが出来から、出来も
 しない事まで一人で爲て苦しまずとも、己れに出来得
 るとばかりをして居て安心を世渡りが出来る故であり
 まして、是れ亦自他共至極便利な所から、一様に如
 此あつて參るのが當然の理ではありませんか、此れが
 即ち世の中で至極重寶な分業といふ法でありまして、
 人間といふ上等の生物にと固より具とつて居なければ

からぬ事でありませるが、獨り人間は此事が行られる
 斗りではなく、彼の小さな蟻の如きものでも多數集つ
 て生活して居るだけ疾く此法を用ひて居まするとは
 氣を注げて御覽なれば斷るとであります、外に出
 て勞れも厭えず餌を拾ひ歩く蟻共があると思へば、巢
 の中又は其拾ふて來た餌を受取て藏積をして居る蟻共
 もあり、又餌を拾ふも大きな重い物であるをあれを、
 直に他の蟻共を呼び集めて多數で曳くを、其餌を搜
 し歩く役目の蟻共と、其荷を曳入れる蟻共とそれく
 仕事を分けて居まする、又蜜蜂も此様の分業を行つて
 居りまするけれども、くだくしくありまするから申
 ませんが、爰も一つ可笑しいのは、アルプス山に居る
 土撥鼠も亦此法で、業務を爲る事でありませ、今其一

例を申せむ、此土撥鼠が住家を建てまするのみ、一組は草を伐る役を致して、一組は其伐てある草を積む役を勤めると、一組之亦荷車とある役で、一組之之を率く馬の役を致しまする、そして其荷車とあるのは背を下りして、仰様もあり四肢を充分廣げて腹の上よりウソト高く草を積ませますると、それを率く土撥鼠殿と車よみあつて臥て居る土撥鼠殿の尾を把へて車の顛覆らさいやうな徐々と牽くのであります、車よみあるのこトで面白くさい役ですから、交替をして勤めるさうで御座います、ナンと此土撥鼠殿こそ能く分業と云ふ法を守り、又能く勞力の多いと少さいやうなことのさいやう睦まじく平等を守つて居るもので御座りませう、却説分業と云つて各自手を分けて働くとが行はれると

と其利益である概略、御了解ありましたで御座りませう、今一度此分業の法が何點まで行かれるものであらかといふと、只今述べました様の利益の外は何程の利益が世よつくかど申すことを述べねばありません、そして又此分業が行はれる爲めに世が如何進んで来るか如何變つて来るかといふことを考へるのが最も大切な事であり、依て前述べました分業の創始から順序を逐ふてお話し申せば假し一つの社會即ち日本を日本又大阪邑からは大阪邑と云ふものを置ての話と致すが了解り易い、ソコで此日本——假し日本と定めて置て——日本と稱ふる一つの人の團體がありまする處で、其初め人数も少く家も至て稀少でありますから、分業法即ち手分けをしてそれ／＼業務をする

と云ふとも亦左程に廣まりません、これと勿論其の筈
 で、世の中即ち社會を進むに従て人々の爲ねをあらぬ
 業務も殖ゆるもので、何故かと申せば世の進むといふ
 のは畢竟前回にも述べました幸福の多くあるものであり
 まして、例へば衣類一つでも獸の皮と剥いだまゝ着て
 居たのも少し進むと之をちりちりして奇麗にするのが出来
 るそれから、又追々進んで來ると今度は羊の毛を剪つ
 て織り込むことを始めて衣類も用ゆる反物とするか、
 又之蠶を飼ふて絹糸を造り其れを又機にかけて反物と
 するものが始まるといふやうに、何事も限らず總てよく
 進んで來るに隨て業務の數が殖ゆるて來るのであるから
 、未だ進まない世よこよい事も出來ない代りに業務も
 少くないに相違ない、すれを其時分れば分業法にて手分

けをするよりも進んだ世の様も細々と手分をする業務が
 ないでもあらうし、又さう數々爲ぬでも宜しいだけで
 ある、シテ觀れを分業の法が段々數多く行はれる様よ
 あるの之社會即世の開け進んだのでありまして、始め
 の業務が百種あつたものが千となり千のものが一萬と
 殖ゆるて往きたのが終に今日の様よあつたので、ソレ御
 覽あさい今日の日本の如き幸福の多い社會が出來たで
 こありませんか、ソコデ此日本あらば日本と稱ぶ社會
 が業務の數が少くないもしろ、繰返して言へば分業法
 の應用が狭いにもしろ、何れいふ風も分業を爲始めた
 かと申すも、矢張前も述べたやうに人々の長所々々から
 起つたに相違ない、即ち木や竹を使ふものが巧者だから
 とて指物師とか家を建てる大工もあつたものもありまし

やうし、魚を釣るとが鍛錬であるとして漁師はあつたものも
 あり、まじやうが、如此て先づ常用の事はかり誰と何
 彼は何と手別を爲た處で、妙きものであります、人は
 大工ならば大工、左官ならば左官と其れ斗りを自分の
 職業即ち食物を買ひ衣類を購める種とし世渡りの道と
 して見ると、大層其職が巧妙もあるものでありますして
 、其出来揚りを見るとあかく、異一人で何も彼も爲
 た時分と違ふて立派なものです、此は又何故かと申す
 と——少しく餘談は涉りませすけれど、序ですから申上
 て置ますか——人間も靈智靈能と申す者がありまし
 て、此靈智靈能と言ふものは何事も好い考へ工夫が
 出てそして好い仕事が出来ます、委しく申せを爰に
 繪を一つ書くと致しまして此繪を書くと此様したらを

魚が跳て居る様も見ゆるであらう水が動いて居る様も
 思へるであらうといふ考への付くのが即ち靈智で、ヨ
 シ其通りまして書きまじやうと筆を落した處で思ふ様
 な筆の廻るのが靈能でありまして、心を留めて考へ手
 を凝して爲ましたから随分好い事が出来るといふ難
 有い道具を持って居ますから、況して同じ風の事異らぬ
 牀の物を幾度となく爲つけたらば、愈々好い工夫が
 出て益々好い仕事が出来るに相違ない、左すれば如斯
 手別をしてそれくの職業する様もあれば、自然と心
 も慣れ手も練れて来るから仕事の仕様が好くあるの
 も決して不審議な事とないもので、此れが亦一人で考へ
 たり爲る斗りでなくて、弟子から弟子と全に職業を襲
 でゆきませすから、其間には廣大な發明も出来又は誰も

知らなかつた物事の道理も發見すやうの事もあるので御座ります、スルト社會の万事が改良々々と以前の躰裁とは漸々好くあつて來ますから、お粗末な着物を着た昔と變つてヤレ毛織だ絹物だと結構な物が出來て來て、裁縫方も彼様では不可いと追々職業の數が殖へて參りまじやう、例へて申さむ木の皮か獸の皮を着るよこ左程手も入ませんから造作もあいが、これが扱木綿とあり絹とあり毛織とありますと、綿と造らねをあらす、それを紡ぎもせねばならず、蠶も飼はねばならず、又繭を糸と練りもせねばならず、羊を飼うて毛を剪まねをあらぬと思へば、又それを晒さねをあらぬの、或は染もする、機もかけるといふ様なもの、それく職業が多くありますから、彼の分業の法も

益々廣く、行はれて來る、そして分業の法が廣く行つて社會が細々密々と職業を別けるに隨つて、物事が愈々こましく進んで來るに相違ない、此れが即ち分業の法が澤山に廣く行つれるのと共に世が進歩を表とすといふ關係でありまして、此れで先づ分業の法が如何様に行つて、何程の利益があつて、そして社會が此の爲め如何變つてゆくかといふとの概略は御了解にありましたで御座りまじやう
然らむ辯士は是より分業の種類の概略と人間と云ふもの何點まで此法を行ひまするかを諸君の御會得にあやう少し申し述べまじやうが、只今まで長々と申した様事事は、何職業にでもあるとで、御覽の通り社會にて千態萬狀屈指の出來ぬは職業の數があります

けれども、一つとして此理の外に出るものはありませ
 ン—之を以ても世の中の事又はチャント定まつた理の
 變るとが判りますとで——然らむ分業の種類は如何
 あるものかと申せむ、辯士は先づ以て之を三類又大別
 して説くこと致します即ち

- 一ハ 即ち政治的分業公共的の職業
- 二ハ 社交的分業即ち生活的の職業
- 三ハ 家内的的分業

であります、ソコで第一即公共的の職業(政治的分業)
 ある者、凡そ人々が相集つて社會ある團體を形造る
 からは、相交互に得失を補ふと即ち出來ると出來ぬ
 と有る物と無いものを交換して足し合ふてゆくと
 が肝腎でありまして其交換融通といふとがあれをこそ

分業の法も行はれまするのであります而して此勞力の
 交換をするに付て、如何ある者が第一と數へらる、
 かと申せむ、豫々述べました野蠻の世界未開時代から
 順を逐ふて開けた世にあつての上で、先づ人々を安心
 生活させてそして人々に代つて社會一般平易く言へ
 ば世の中全躰に係る諸般の事務を辨へてゆき、萬事人
 々又代て社會を保護する人でありましたやう、此れが即
 ち公共的の職業を取る人で、公共的職業とは社會に生
 活して居る多數の人々が爲るべき事を引受けてする職
 業といふ義でありまして、之れを又政治的の職業とも
 申しますのも別異つた道理あるのでと云い、此様
 の事務を政治の事務と唱へますから如此申したので、
 只其別名をつけたと言ふばかりの事でありませ、然ら

此種の職業も分業があるかと申せば、あるともく
 大ありで御座ります、之を先づ諸君の一番耳に慣れ眼
 は慣れて御出なさる所からお話し申さうならむ、今日
 我日本國では、天皇陛下が一統の權といふて國內を自
 由に御支配なさる、御力を握ていらせられますが、
 サラバとて何程御賢く在せられた所が、到底御一人
 で彼も此もと萬機を御手づから御扱ひ遊をすわけよと
 参りません、ソコデ入用よあるの今この國務大臣とて
 陛下から御信任遊をして一國の事を扱これる方々で
 あります、シテ又此方々が何も彼も一つの本に纏り付
 けてお仕舞よあるわけよと参らぬ、否左様おされてこ
 却て損でありますから、先づ内閣といふ一箇の大々
 りの役所を設けられました大臣方が各般の事を相談

なさるゝ處と致し、而して九人あり十人ありの大臣方
 が、皆それゝに受持を定めて事務をお執りよあるの
 で、言こゝ一國の事務を九ツあり十ツありに別けてソレ
 外務、ソレ内務、ソレ大藏、ソレ陸軍、ソレ海軍、ソ
 レ農商務、ソレ司法、ソレ文部、ソレ逓信と、類を集
 めて御受持にあるのである、此れが即ち先づよく判つ
 た政治的分業でありまして、さらむ又此九人十人の
 大臣方で彼も此も扱へるものでありませんから、爰に
 又下僚といふものをお任じよある、スルト此下僚の方
 でも全しく類を集めて分業を行ひませ、それからそれ
 とズーツと下役よあるまで、皆分業を以て事務を執る
 のであります、此他下りましては市町村の役場に至る
 まで種々ある公共的職業の中で分業の法のある事を申

せむ、數限りとありませんが却て煩雜ある斗りであ
 りますから、委しいこと政治と云ふ處を御覽あつて
 御推察を願ひます
 次に述べまするのは社交的分業一は生活的の職業と
 名をつけましたのでありまするが扱此分業は如何様か
 ものかと申せば、我々人間が此様して一處は生活して
 居るは前も述べました通り種々雑多の物事が入用
 でありまするから——尤も政治の事は第一は別けて置
 ましたから、除外と致して——皆それの長所々々
 で交換をしなければなりません、例へば甲の人は米麥
 を造るとか出来れば乙の人は其れを賣るとが巧者であ
 るから商人とあつて取次をせる、スルト丙ある學者が
 農業の事と如此しければならぬとか、又と如此すれ

米の穂が澤山出るとか言ふて教示をすると言ふやう
 に、食へるとから衣る事から住家のと其他虚飾事であ
 らうが、何から何迄それの職業を爲て、其勞力を
 賣買即交換して、各自不自由のさい様、快樂の多い様
 と力を盡し合ふてゆくゝら、之を社會の交際に要る分
 業即ち社交的分業と題け又人々の生活してゆく上に於
 て是非とも爲なければならぬ職業であるから、一名生
 活的職業と稱へたのであります
 然るも、前掲げて大別を致しました三類の分業の中
 で、凡そ此類即社交的分業は益潤くて而して錯雜あ
 るものはありますまい、尤も第一の政治的分業も隨分廣
 くて錯雜でありますけれども、之と本來此第二類の
 職業を監督する位のものであると申しても宜しい程で

すから——尤もさう容易いことばかりは申されませぬが——第二類も比べて何程でもありません、且又第二類は今日我々が相集つて成して居る社會の基礎根本と申す位のものでありますから、其潤いのも錯雜なものも當然のことでありまして、其邊の事と前々述べて置ました人々が集會りて社會的の制裁を掃へるおぞの所を繰返してお考ふれば判明るとでありませしやうから爰も省きまして此第二類社交的分業の概畧を述べて如何いふ風分業が行われて居るかといふとを研究致しませしやう

諸君よ、諸君之先づ眼を鄙地僻土に注いで御覽をさい、其處には果して如何様の事が現れて居りませしやうか、莎茫と見渡し得ぬ程の野や圃の傍に外觀も構へぬ

質素ある家のチラバラと屋根を見とせる、之等は諸君何と思召しますか、此家又住で居る人々は皆朝早くから未鋏を手取て此處の野彼處の圃に出で、日暮れて星の顯はれる頃迄と放々と働いて居ります、又家の内よと婦人小供が相集つて、何か頻りよ青葉を切ては棚の上に撒いて居ると思へば、彼方の家も多數の女子達が手よ車を以て忙しさに廻して居る、男子と云ひ女子と云ひ、家の内よ又外よ、唯日の短かいのを苦まして身を働かせて居るが、之等と一跡何の爲でありませしやうか、皆々外の事は無い、此第二類即ち社交的分業の責任を盡して居るのであります、即ち米麥其他の穀類及び野菜を造り又は蠶を飼ひ糸を繰りおぞして、之を交換の市よ持出さうと急いで居るのであります、

又諸君よ、諸君は一度深山人徑なき寂闕とせる中を歩いて御覽あさい、何處より聞ゆるとなく了々たる斧斤の音響も響いて凄愴きを、鳥の跡熊の跡の外絶て人影をも見ない山奥よと、不もく何事あつて此音をさせるのでありましやうか、彼等と樵夫であります、即ち此淋しい中で樹を伐て材木とあし又は焚料あぞと爲して市場も出さうと氣を揉んで居りますので、此他漆を取り又と紙を漉く原料とある楮あぞを伐て居る人もありまして、皆是れ社交的分業を守つて働いて居るのであります、諸君よ、諸君は再び轉じて身を水か空かと疑ふばかりの彼の大海の中も置いて御覽あさい、一帯の黒烟を残しながら波濤を蹴立て、彼方へ駛る蒸氣船もあれば、帆も滿幅の風を脚ませて此方へ來る風帆船

もあり、小船幾艘となく打寄りて逆寄る荒波の吼るが如く躍るが如き怖ろしき勢をも層敷とせず曳々聲に四邊を駭がして網を曳くもの、又と扁舟葦の葉の如きよ打乗りて、打つ波も一度は高く一度は低く脚下も据らぬをかりの中に竿幾本かを並べて釣を垂れる者、是れ皆船底一枚を頼みの綱とあして危険き境を冒して何を爲るのでありましやう彼等は人を載せ貨物を積で甲地から乙地乙地から甲地と運ぶ爲め、魚を捕へ貝を採る爲め、全しく社交的分業を行ふて敗を取るまじと、身をも忘れ家をも忘れて職業を勵んで居るのでありませんか、諸君よ、諸君も又試み都下繁昌の境十字街頭も行んで御覽あさい、商家は軒を列ねて店頭も人足絶えず、喧々擾々と語る聲と蜂の巢を断て墮したやうな

、小車こぐるまも荷にを出すもあれを亦また入れるもあり、人々ひとびとが忙せわしさうな又また駈か廻まわる態さま、それを又また乗のりせて奔はしる馬車ばしんりき人力車りきの轢ふれる音こゑ、之を見み之を聞きれたを何なんと思おも召めすか、彼かれ等ら之を商賣しょうばいに忙せわはしく、進退しんたい應對おうたいも暇ひまなくして西東しとうと駈か歩あるので、それも又また此人々このひとびとの歩行ほこうを助たすけやうとて馬うまを駈かし車くるまを曳ひく人ひと、皆是みなれ社交的しゃうてき分業ぶんげふを勤つとめて居ゐるのではありませんか、此他このほか汽車きしやの轟ごう々と音こゑして長蛇ちやうだの如ごとく又また駈かれる、電信線でんしんせんの綿々めんめんと接ついて設たげられてある、郵便ゆうびんの馬車ばしんりきを走はしらせ又または脚夫きゃくふの喘あぎ々ぎ疾馳はやくはしせる、一つひとつ去されば一つひとつ來きり、一々いちいち眼めを付つけることさへ出で來き難がたい程ほどもありとあらゆる敷あり多おほき現象げんさうは、皆是みなれ社交的しゃうてき分業ぶんげふの寫真しやしんでありまして、人々ひとびとは皆みな此この分業ぶんげふの法ほふに依よつてそれれの職業しやくげふを行おこふに愛身あいみを妻めづして居ゐるので御座ござりま

す、如斯かく述のべますと我々われらが日々ひびと又また視且しかつ聞きく職業しやくげふの多分たぶんは此社交的このしゃうてき分業ぶんげふでありものものとありません、故ゆゑに其濶そのくわくて錯雜さくさくおののも勿論もちろんのととですけれども、今之いまこれを大別たいべつして三つと致いたしまして、其外そのほかも今一つ二つ此三つの中このうち又また組くみ入れいれ悪いものを別問題べつもんたいと致いたし、先づ差當さしあたり三つの者ものを概略がいりやく述べて、そして分業ぶんげふは何邊なんべんまで細こまかく行おこつこれ往さくかといふとを定めましやう

然らば其三つと何々なんにでありませんしやうか、之を掲あげますれば即ち

農 工 商

の三門さんもんでありませんるが、此三字このさんじ又また就つて疾たく諸君しよきんの御ご存知ぞんじの義ぎでありませんるから嗚々うう講釋かうしやくをするにも及びま

せん、故に此からと此三つを一括して述べますから其御心得で御聞取下さい

諸君御存じの通り農と五穀野菜等を造る計りでありません、蠶を飼うて之は桑の葉を與へ繭を取るのも農であります、又棉を造るのも農であります、此他農といふ類の中で其作物の數即ち職業の數は麻といひ牧畜といひ随分澤山ありませるが、之を總括めて農産物と稱へます、ソコで此農産物といふものが其ま、直に物の用と立つものばかりでありましたならば何も面倒はありませんが、必ずさうばかりと参りません、スルト之を用ひ物とするよと工といふ種類の人の手もかけなければなりません、例へば繭といふものは取りました

が、此繭では直に用るとが出来ぬやうな、又棉は造り

ましたけれども、其ま、用へる用ひ口もありましたやうけれども、糸として賣るよと其ま、でと用ひられぬやうな、いづれも繅糸器械紡績器械などの手を経らねをあらぬものとして見ると、農と工とを眞と曖昧しくて何方が何方とも分らぬやうなところがあいは申されません、故に此處で一々並べ立て區別を判畫しやうとしたとて、左程御利益にもありませんから、辯士と假したとて、此二つを一括に致して商といふものとの關係を申すはやう、却説農か工か品物を製へて出すと致せば、之は如何して賣つたらば宜しいか、何分も世間の事ですから物品の入用を人と澤山あると相違ないが、されをとして此品は誰か入用で彼品は誰か買であらうと調べて居る譯もありません、否其様の不便ををし

て居ては賣る人よりも損であらうが、買ふ人も亦探し歩かねばならぬといふやうでは不利益でたまりません。すれば此賣る人と買ふ人との間も周旋して何時でも賣れ何時でも買へるといふ便利を興へて呉れる人があければ、これを即ち商人でありまして、商人は此賣買を周旋するのには、ソレ此様の賣物がある貴下お買ひあされぬかと勸めて歩行く様では同じくつまらぬから、先づ品物を賣る人からは自分も買ふて置いて、それを又少しづつでも澤山でも買ひたいといふ人々に賣るといいたした、即取次をするからに賣るよりも買ふよりも何時差問へぬ様に世話をして、そして其世話料よりは口銭といつて買ふた價格よりは何程か高くして買手も賣つた差違を取るとい致した、故に商人は農工が製

へ出た品物を買込んで、そして其品を誰にでも入用の人より賣ると招牌を掲げて居るものであります、シテ見れば農工と商人との分業と世の中に頗る大切のとて、此分業をした爲めには如何程人々が助かつて居るか知れません
 如此お話し申ましたからを社交的分業の農工商と別れてある三つのものゝ關係を察御了解なかりましたでありませう、即第二類の分業が如何なるものであつて、何程の利益があるかといふとは多辨を費さずとも御推量なされませうが、扱此分業が微細な点まで行われる程物事の進むで参ると申すまでもありませんが、凡そ此類の職業程品種が多くて世が開ければ開ける程益々殖へて止まぬものがありますまい、故に全じく

農とはいひながら、其中にも漸々と細かく分業をして爲るとよかりますから、例へば米麥を造る人と蠶を飼ふ人とが全然別物あると思ふと、全じ米を造る人も又蠶を取る人も桑の葉を摘む人と蠶を世話する人と別れ又稻を刈る人とそれを乾す人と糊を摺る人と別れる様を風よかりますから、之を敷へて見たらば實は筆紙よ盡せぬ程もありましたしやう、如此して商人と商人で漸々微細く分業をする様にあり、工人は工人で漸々微細く分業を行ふ様よあつて、何でも一種一品でなければ人々が爲ぬ様よありましたから、是れこそ分業の法のはれた最頂で御座りまして、隨て物事も頗る開けた時よ相違ないのであります。

次よ第三類即家内的分業をお話し申ましたしやうが、此

れは諸君よ最もか了解易くて又他の分業に比べますると至て區域が狭う御座ります。

却説人間が如此して住んで居りますのは家でありまするが、人々が此家を構へてそれくの職業を致しませるよは誰しも食もせねばならず衣も致しませしやうし、又女房を迎へて子を産めばそれを養育せねばならず、教育もせねばならず、若し又老年の親達があれを孝養も盡さねばならず、他人との交際よは往來共それ相應の接遇もせねばならず、隨て此心遣ひ萬端から家内よ要る金錢の出納やら厨所の事までも一々と並べ立ましたからを随分いろくと忙しいとで御座りませしやう、デ若し此れを一人の手で爲てゆきましたらば如何で御座りませしやう、裁縫も爲ねばならず、厨所も

立廻らねばならず、加之に老人のことから小児の事までぞと申した分は一人の手は種々の事まで修業をして置かねをならず、假令それ出るとした所が、自分の職業といふものは左様なものでないのでありますから、常々家内の事かまけて居て自分の職業を執ることが出来ずまい、すれば是れ到底一人で爲すべきとでありませぬ、至て不利益に當りますから、家内の事一切女房殿が扱つてゆきて、主人公は其職業の事をかりを爲るといふ分業の法が始まつて参ります、然るに女房殿も家内の人数でも多からうものからば、何も彼も自身一人で立廻つて往くわけに参りませぬから、又下男下女とかいふものを備入れてお縦には衣類のと萬端を任せる、お農又は食物向の一切を

石田興長曰く 家を治むるには儉を以て本とす其本立てと即ち奢侈の心去り自から父母の心を安んずるを得べし而して我が餘財を以て孤兒寡婦を惠むを樂み亦大あらすや

頼む、權助よと御使廻りから随力業の事を爲せるともつて、自分は其此の指揮と可及的家内よ要る金錢を巧み振廻す事から一切の家政を引受けてやる——序がから申上ますが、家政とは如何なる意味かと問ふ、此家の内といふものも五人あり十人あり住んで居ますからに、矢張一國一郡と全じ道理でありまして、小さいか大きいかの相違こそあれ、全く政治を行つてゆかねをありませんから、家内の用事を扱ひ萬事の規律を正しくするのを家の政即ち家政と申して、婦人達よは最も大切を事でありますから、女子の學校をぞでは殊に家政學を一種を授けまする位なもので——又此外は小児の教育をぞと婦人が負擔せねばならぬもので、要する處は夫と第一類即公共的職業か又は第

二類の生活的職業は従事して人たるもの、世に對する
 貴務を致しますから婦人が家内の事を引受けて好い様
 又支配をしてゆくとあるので御座ります、ソコデ夫が
 官吏とかいふ政治的の職業をするのでしたらば御役所
 又出て勤めるから宜しいが、第二類の社交的の職業を
 する、即ち商賣あり工業あり農業ありを爲るとありま
 すると、少しく手擴くすれば直に一人の手では廻り切
 れなくあります、スルト手代とか職人とか弟子とか丁
 稚とかを備ふて誰は何をする彼と何と事務を分けね
 ばならぬ、是れ亦分業でありまして、大體に別れる處
 は二つか其處等ですけれども、それからそれと微細い
 點まで分業が行われて來るので御座ります、故に此類
 の分業を家内的分業と稱へまして家々の内部で手を分

けて一戸の總事務を執るといふ意味で御座り升
 此の如く大體三類の分業を述べましたから、諸君と
 世間の事家内の事とも皆分業の法が行はれて居ると
 を御承知なありますので御座りましやうが、扱人々が
 此世は生活して居るに當て何が爲め此法を守つてそ
 れ々の職業を勵むか、又は如何いふ事が此くまでも
 人々を逐廻すかと申せむ、然らば人間は何の爲め此
 世に出で來たのかと尋ねると全じ事だと思召す方もあ
 りましやうが、これ又は是非如此をけれをならぬ理由
 があるので、凡そ人々が家を爲し國を成しまするに
 、人と食ねをならぬと簡短に申す通り、家も食ねを
 ならぬ、國も食ねはねばならぬ、一つの人跡でありまし
 て、家を持つて家を維持してゆくだけの物があつてはあ

りませぬが、其家を維持てゆく品物といふものは自然
 天然又其家に具ッては居りませんから、其家又居る人
 々が造るか何様か爲さなければありませんけれども、そ
 れを造るにも種子があくては造れも致しません、例へ
 ば衣類を造らうと思ふた處が反物があくてとあらず、
 飯を炊かうと思ふても米があくては出来ませんが其反
 物あり米ありは呉服を賣る店に往けむある、穀物店よ
 往けばあると承知して居ても、其品を呉れといッて無
 錢でと誰もハイと言ふものありませんから、自分の
 家でも亦出来るとして其れを貨幣又易へて、其貨幣
 で先方の品物を買はねむありません、故に身を保ち家
 を維持うとすれを據るなく働さもせねばあらぬといふ
 様よ、爰又一つの職業を始めませ、そして其職業さへ

爲て居れむ安穩に生活して家を維持てゆけるとあると
 益々勉強して可及的澤山を貨幣又したいとあるのは人
 情でありますから、稼ぐよ追付く貧乞をしとやら申
 して終又は貨幣が常住餘ッて來て富豪とあるやうに、
 世の中の人が皆々働かねむ食らぬぬ衣られぬ不自由だ
 といふ事は逐廻されるから、自然と分業も盛に行これ
 てそれ々の職業を屬じやうよあるのでありませ、シ
 テ觀ると働くのが當然で、働かぬの之間違ッて居るの
 で、約まり食ねむならぬ衣ねむならぬといふのが勞力
 の交換とさッて——品物で交換としても矢張勞力で出
 來た品物ですから勞力の交換又相違ない——その交換
 といふところが分業を盛よする即ち各自一筋の職業をして
 自分よ入用なもの他から買ふ風を生活方を進めると

にあるので御座りませう、ナント諸君如此煎じつめて観ると世の中の機關と自然の理といふものがあつて、其理が立つてゆく程巧妙く廻つて參るものではありませぬか

偕て如此あつて見るとズーッと巻首と述べて置ましたやうな世間も無用な商賈不用な人と更にない様もありまするが——乞巧だの遊惰漢は別として——爰も一つの判明り難いものが一つ二つあります、此れが即ち前も社交的分業を農工商と別ました時と此三つの中にも組入れ難いと申したものでありまして、彼の學者と申す人々又と其類の人々でありますが、此人々は如何いふ事を社會に爲て居りまするか又と何程の利益をつけて居るか、未だサツパリとお話しをして居りませ

ンから、判りますまいが、此れ程世の中も利益をつけるものもありませんで、隨て此れ程大切なものはありません、依て今其性質から効能まで概略申上るゝ付て之辯士が爰まで長々と述べました諸々の事が、本書の趣意即ち題名に表としてある通りの學藝入門と云ふ事ゝ付て何故ゝ入用であるかといふ事と如何程の關係があるかといふ様を述べねばなりませんから、次回も譲りましてそれで此緒論の結着をつけることと致しませしやう

第六回 學藝入門

諸君辯士と前々回に於て野蠻世界未開時代から漸々進んで來るゝ隨て社會も取締が出来て人々が安全も幸福に生活することが出来る手續を述べ、次も前回ゝ於て人々

がそれく職事を分けて爲る事が始まり終り社會は一家の内と全じ様に共稼ぎをして各自の不自由のさいやうに爲るとから此分業といふ法が行はれる爲り又世間が如何様も變つて來て、人々が如何程の幸福を得るか、又其分業の法とは如何あるものであるかと云ふとを述べました、此れで先づ一通り社會が今日の如く又進んだ手續きも判明りましたやうのとでありますから、今回は學術技藝と申すものが起つた由來と、其れが何程社會に利益を興けて、其品種が如何様に分れて居てそして學者技藝家あるものが矢張り一つの職業であつて分業の法も協ふて居ると、及び人々が多少共此學術あり技藝ありを學び修めなければならぬ所以を概略お話し申して、それから第二篇と進んで數多の學問の

事から其性質效用等を一つく分けてお話し申すので御座ります、故に本回まで即ち第一篇と緒論又と総論と申して此學術技藝の事を一々申上るまでと述べて置かなければならぬ事ばかりを述べたのでありますから、言とい今日の世は諸君の日々御覽よあつて居る通りでありながら、之を解剖して置きませんと學問の理が解り難いから概略剖いて置いたので恰度お醫者様が病氣を診察するには、先づ人間の體驅が如何出來て居て、體内の諸道具即ち胃だ腸だ肺だなどといふものが如何働いて居るか云ふとを承知して居なければならぬのと同じ事であると御承知下さい

却説、諸君、我々が生活して居る天地の間には何事も定まつた理がありまして、総て此理の指圖する通り

か、左きくとも此理に沿うてゆくものでありまするか、此様の事は唐突に申上たとして了解難う御座りましやうから、身近な例を挙げれば、彼の中天に懸つて地球を照す太陽であります。あの太陽の下に濕れた物を曝らして置ける其物が乾きます又諸君が太陽に向つて身を置かれたら其日のあたる點が暖かでありませる、すれば此太陽といふものよと我々が物を乾かし或と寒威を凌ぐ燃火又と炭火の如く熱といふものがあつて其熱を地球に送るゝ相違ない、シテ其熱は何程の力があつて地球の動物植物は如何程効能があるといふとを研究した處で光線の理又と熱の理といふものが出て来る、又一例を舉ぐれば米といふものは日本人は餘程大切なるものであるとして、若しも此米が凶年で

不作の爲め平年の半分より收れあつたとか何とかいふ時と、直ぐ其直段が騰貴する、即ち他の品物よりは割合に高價がある、倍此れは何様な理由でかと思つて見れば何も不審議のところが、買うとする石高よりは賣る方が少ないから、即ち需要の方と供給の方とが釣合をぬからであるので、然らば物の價値といふものは需用と供給との鹽梅で定まるものなといふ理が一つあるのであるといふところが判明する、此等は皆定まつた理といふもので、未だ未開時代でも多少の理は發見して居りましたけれども、少く高尚な事もありまします、一向解らなかつた者であります、然るに人の智慧が開けて来るに随つて、此様の理が追々解つて来て、それが又今日では種々の學問をなつて居りまするが、

扱此理を考へる學問が翫弄の爲め用ゆるものから至て馬鹿げたものでありましやうけれども、決して左様なものでない、實に大切なもので我々が日々見る物聞く事皆此理を考へる學問から出たものが多くて、そして諸々の物事が此學問の爲め夥しく進んだとは次々述べます所で御會得が参りましやう

諸君、諸君が今日身も纏ふて御出される衣裳の色は何でありましやう、其色は種々ありましやうけれども、一色として根始から付いて居た色はありませぬ、皆職人が染めたものゝ相違ありませぬが、扱色といふものが自然な赤でも青でも勝手氣隨ふあるものでありましやうか、否決して自然に出来て致しますまい然らば何様して之を製へまするか云へむ之と矢張色の理も

依て製へたゝ相違ない、シテ其色の理と何でありましやうかと云へば、赤と青とを合せれど紫とあり青と黄とを合せれば緑とあるかどが即ち色の理であつて、何様の色でも総て此理を知らなければ出来ませぬ、シテ又其色を以て諸君の衣物を染ましたが、之をばけぬやう又褪めぬやうするのも亦それの理に依て出来るのであります、又諸君が御家にお歸りなされれば、殿父様もありましやう、慈母様もありまされましやう、そして又兄様姉様もありまされる方もありましやう、弟様や妹様のおありなされる方もありましやう、然るゝ諸君が此父上や母様の御命に従ひて背かぬやう兄様や姉様又は敬意を失とぬやう、弟御や妹御を愛しみ導きおさるのも、皆是れ何でありましやう、若し又諸

君が御成人をされまして世間にお立ちあさる時には、君も忠を盡し國を愛し、同胞の幸福を増すとを念願られるのも、畢竟天地間の大きな理があつて而して其理に従て行これるで御座ります、然らば理といふものと我々が日常用ひまする諸種の品物をとじめ、我々が今日此世界に安穩又幸福な生活すとの出来る諸般の事件を産出す根本でありまして若し一日も此理があく、此理が人々に知られあかつたならば、我々が此便利を面白き世に居て滋味を食べたとも出来なければ、温かく衣る事も出来ずまいし、耳を喜むせると目を樂しませるとも出来も致しますまい、而して最も怖ろしきと若し親も孝、君に忠、人々も愛あぞの行をなすとの理がないやうなとでありましたならば、世の中は至て

秩序なき亂れた麻の如き情ない有態とあつて、到底安穩な面白く生活すとも出来もせねを、第一生きて居るところが出来ぬやうなとかも知れませぬ、シテ觀れば此理といふものは實に廣大なものでありまして、いかに我々が此世に生活して居る氣息の根を申しても宜しい位なもので御座りませうか

此の如く物事の理といふものは我々人間に大切なものでありますが、然らば此理といふものこそ人間が製へたものであるかと申せば、決して左様でござりませぬ、是れ皆造物主から下し賜へつてある、語を換へて申さば此地球に具つてあるものでありまして、人間は其れを發見したのであります、そして爲る事行すと此理を用ひたので御座ります、シテ觀れば此理といふもの

と人間創まるや否や完全と備はつてありながら、それを發見すの又手間が取れて今日迄びまだ今日も種々お理を發見して手柄とする人があるでありまして、決して人の一代や二代乃至百代やそこらで發見し盡したのでありますまいが、然らば人間が何様いふ風な發見したかと申さむ、彼の野蠻世界未開時代と稱へるのが即ち此の理の發見を爲し得なかつた時分でありまして、假令少しむかりと發見して居ても左程此理を用ふとの出来なかつたので御座りませう、之を例へて申せば何程野蠻人とても太陽が日々東から出て西に落ち、そして夜と晝との分れるとは存じて居りまするが、然らば何の理に據て此様の事が出来るかといふとよかつては更な存じませぬ、故に彼の大理學者と

して隠れのさいニュートンといふ人が僅かにホタリと地を墜ちる林檎を見て地球の引力あるものを發見しましたけれども、之れを野蠻人は觀せましたからを只々林檎が一つ樹から墜ちたといふとばかりは知りながら、何故にそれが地の方へ向て墜るかといふと即ち地球又は引力といふ性があつて、其引力の爲は何物でも空中から地の方へ向つて來るのだといふ微細な理に至ると思ひも付かぬとであります、否此様のとて野蠻人はかりでなく、今日の人々でも無學な人には一向心付ぬでも御座りませう、すれをニュートンが林檎の樹から墜ちるのを見た目も、他の人々が林檎の墜るのを見る目も全じ目でありながら事物の理を發見す人と發見ささい人と其間大きな差違のあるものでありまし

て、此様の理の人間は発見されたい間の人々が爲すと
 行ると至て不自由なものでありましたのを、日夜心
 を潜めて考へ究めた上、それぞと人々を報道せて呉れ
 たのこ、我々人間は取て莫大の恩恵と申さねをありま
 せん、其庇護を以て爾來電信の如き便利を器械も出来
 る、蒸氣船蒸氣車などもいふ重寶を道具も出来、而し
 て又政治向も良くなり、法律も整つて来て、究竟我々
 人間の幸福を増すと、謝する詞さへある位なもので
 御座りませしやう

諸君よ、此く簡單に申せば凡そ物事の理を発見とあぞ
 といふと至て造作もあきとの様と聞へまするけれど
 も、今も申した通り全に見る目を持って居ながらも迂闊
 過ぎるか、假心を苦しめて考へた處で中々容易く発見

すといふとが出来ません、それ故に古來此様の事をす
 る人と先づ物事を観て自分の心は疑を起す、例へて申
 さば今鉄瓶の湯が沸騰したが、するとあの重い蓋がヒョ
 コ々々々と持上つたあれば一跡何の理で持上つたか知
 らんといふ疑の心を起すのが始まりで、種々心を費し
 た結果も出たものが多いのでありまして、其處まで遣
 り遂げるに一年や二年の苦みでなく、往々自分の一
 生涯を此工夫に費してさへ出来なくて、後の人志を
 續で漸く発見したのもある位なものでありませぬから
 、世間尋常の人が職業を執る片手間にするあぞといふ
 やうのこでは、小さなとあらば兎も角、到底大なる理
 を発見するあぞのこが出来ません、ソコで又前回に申上
 ました分業といふ法を用ひて、此様の事をかりを爲て

職業とする人が出来ることにあつた、シテ其人々の責任
 と前々の人々が發見した諸般の理を質して世に保存
 こと、自身も力を盡して未だ發見ない理を發見して當
 世を益し將來に便するやうなとして其理を實地に用ひ
 るやうにすると定まつて、此人々を名けて普通學者
 と唱へるとよかりましたので御座りまして、辯士が前
 回に社交的分業を説いたときよ、農工商の三つの中
 に入れ悪いから除けて置いたのは此學者と名ける部類の
 人さぞの事でありませす

却説、此様よ世の中よは學者といふものが入用あとも
 あり、又此れが爲めに我々人間の萬事が進んで來ると
 よかりました、此又學者とても種々ある天地間の事
 を何も彼も齟齬で、此れと如此をあらぬものだ

、彼れは如此爲さければならぬものだからと指圖をし
 て居るとは出來まいとでありまして、且其様よ致した
 らば孰れの事も進まなくあつて不利益でありますか
 ら、爰に又分業の例で、それ／＼別々研究し且指揮
 するとよかりましたから、今日の如く政治學、法律學
 經濟學、理學、化學さぞと澤山分れて居るのであり
 まして、皆それ／＼の擔任が定まつたのであります、
 そして其理を發見して如彼如此と研究するのを學とい
 ひ、其理を實地物事よあてはめて用ひるのを術といひ
 、之を総括めて「學術」又は「學藝」と唱へるので御座りま
 す

然らむ今此學術あるもの、目的よ付て更に述べましや
 うが、其種類と澤山ありまするけれども、究竟は左の

如きものであります仍ち

學術社會の業務と、其學科が何であらうが、即ち政治學科であらうが、理學科であらうが、凡そ宇宙間に存する眞理を探究發見すを以て目的とする

と簡單に申せば宜しいのであつて、此又學術あるもの、數多き區別は二篇を御覽よあつて追々御了解よありまするから、爰よ大脉をお話しするに止めて置く致します

却説、長々と述べまして餘程紙數を費しましたが、先づ此れで學術といふとが何程人間に大切なるものであるかといふとも概略御了解よあり、又其學術が種々分れて居るとも御承知よありましたからは、此から第二篇に移る準備として、今迄述べました事の結論を致し

且本書の趣意を申上て置かねばなりません

諸君、世間又は卓子論だとか書生論だとか申しまして、理屈を言つても嫌される人がありまするが、何程これも餘り無理のない話してありまして、此様の人を見まするよ多くと理ばかりよ拘泥り過まして、兎角實地に行これおいとを申すからで物よ譬へれをマ一跛足とでも申しましたやうか、何故おれば此様の人は随分理は辨へて居りながら、それを巧よ應用ふとを致し得ませよから、言ふとが行へませよ、恰度跛足が片足は長くて片足が短いから、歩行くよも高かつたり低かつたりするのと同じやうよ、口でと言ひましても行へぬやうお揃はぬとでは實よ困つたものと申さねばなりません、著者が此書を綴りましたよも亦大よ此跛足が嫌ひで

卓子論だと言はれるのが厭で御座りますから精々實地の事を述べて、そして諸君の思想を固めやうと存じまして、御存知の通もく、社會の創始がらの經過を述べ出しまして、人間が進んで來た風を並べ立て、兎角理といふものを擔ぎ出さず、漸く本回よあつて理といふものを述べましたので御座りまするが原とより此書之諸君が何職業をあされましやうが、一應の御心得があくてはあらぬ事ばかりをお話し申し、若も著者の述べた言でも御意志にとまつて、チー自己と何々を學ばなければならぬとか又これは如此いふものかをいふとの御心付でもありましやうあれを重疊であるので御座りますから、ヤレ此れも理彼れも理と難かしく申さすとも、其れと又各個別々の學問をあされば解る

と存じたからでありまして、其故第二篇には強ちも學問をかりの事を申上るのでありませんけれど、亦科學として難かしい講釋を致す譯でもありませんが、今迄長々と述べた社會の形勢なども即ち後よあつて實地の事をお話しするのみ心得て置て願はねばならぬからとて實地のお話しをしたのでありまして、之を致したのも却て後よ理屈を澤山申上すとも好い爲めでありませ、如斯申さむ諸君はソレならは何故終章よあつて學術々々と喧ましく述べたかと仰もありましやうが、それは著者が何程理屈を言はまいやうとするからとて致し方のさいとでありまして、既に天地の間も理といふものがあつて、それを發見せあかつた時分あらを覓も角、今日の如く其理の學問を立てたからよは、何事も

此理から出てもそのし、又此理から出たものでなければ
 あらぬと定まッて、言をを理の學問で人間萬事を支配
 して居るのでありますから、實地のとをお話申した後
 では是非申上ねをあらぬ順序と心得、且は次篇に申上
 る事、便利であるから一寸擔ぎ出して置いたので御座り
 ますから、其邊の用意と全篇御讀下すッたら御了解は
 ありまじやう

右申上た如き次第でありますから、次篇には至て卑
 近なところから始めて、可成實地思ひ當りおされるとばか
 りを述べまざるから其お思召で御覽を願ひます

第二篇 各論

第一回 言語

◎ハミルトン曰く
 言語は思想の城郭
 あり

◎マユレー曰く
 蓋し吾人は文字を
 用るも事物の形状
 を現はそを得ず而
 して詩家の業は文
 字の上を在らせし
 て其形状を現とす
 ん在り勿論詩家と
 文字を用うれども
 是れ唯其器械と

諸君、凡そ何れの國を問はず、人あッてより以來言語
 のないものはありません、抑も言語は人の思想を表
 すの道具でありまして、若し之あかつた時よと、人々
 相生活してゆく上に於て互に其意志を告げるとも出来
 なければ、又交際をしてゆくとも出来ません、究竟人
 々が相集ッて社會をあすとも出来なければ、隨て萬般
 の事物が進むといふととあいのでありませしやう、故に
 如何ある野蠻の世界でも高尚い思想を表す言語と乘も
 角も、其時代々々も應じて日常要用の言語をかりは持
 へて居たとは、敢て太古を尋るも及むず、近く亞米
 利加の印度人の生活を調べて見ても、又亞弗利加土人
 の今日の現状を觀ても分明なとでありまして、唯其時
 代の言語と今日文明開化の世の言語と違ふ處は、太古

して之を用うるのみ固より其目的は非らず文字と心の眼に判然と事物の景状を描き出すの材料あり然り而して徒ら文字を列ぬるも心と事物の形状を書き出すを得ざらんよは之を詩と謂ふ可らざると猶は彼の畫具の一箱若くは畫布の

よは至て粗放とした言語であつて、今日でこそそれが大層緻密しくなつて居るとであります、然らば何故言語に今と昔とよそれ程の相違があるかと申せむ、固より左様あるべき理であつて、ろして是非左様あければならぬとであるので、言語といふものが既ち思想の表を野蠻人の如き緻密しい思想の無いものよは必ず言語も粗放としたものよ相違なく、否粗放とした思想よ又それだけの符號即ち言語さへあれば澤山でありましたやう、シテ觀れば言語といふものよ人の智力が進んで來るよ隨て緻密しくあるもの、即ち人智と共に進むものであるといふとも隨て了解りましたやう
却説、言語といふものが此様人間に大切なものであ

一卷を指して繪畫と稱す可らざるが如し

◎シエクスピア曰く 空々無一物よく授くるよ寓所と名稱とを以てす

◎李塗曰く 文字須らく數行整齊の處あるべし意の對する處文却て必しも對せず意の必しも對せざる處文

つて野蠻の世界でも、文明の世界でも、それ相應よ言語を以て思想を通じあひ、意志を告げあふて居るものでありましたからを、今日の如く英語とか佛蘭西語とか又は日本語とか支那語とか申して、皆それくよ異つて居ては随分不便なとであります、此れが即ち未開時代の紀念と申しても宜しい所でありまして、往昔世界の彼處此處に人間が散らちと住んで居ました頃は、固より物事の進んで居る時代でありますから、少し計り隔れて居ても殆ど天地程も距れて居る様でありまして、彼處の人間は此處の人を知らず、此處の人も彼處の人間を知らざるといふ風、一向異つた土地同士の交際といふものがありません、況して大洋を隔て、容易に逢ふとの出來ない土地をぞでは、自分等

却て對を著しくも
◎レイノーツ曰く
談説するもの種を
播き静黙するもの
果實を收む

◎サベンサー曰く
便利の語も屢々こ
れを云へば信條と
ある

◎王充曰く 書よ
稱す齋の孟嘗魏の
信陵趙の平原楚の
春申君、士を侍し

の外は人間といふものとかい位を心持でありますか
ら、各自勝手な言語を拵へて其土地々々の用を辨じて
居たのでありまして、若し此時分は世界中の品種を敷
へて見ましたから、今日の國語の敷どころであく、
夥しく異つた言語があつたでも御座りましやうが、先
づ第一は此異言語の敷の減つたのが、彼處の人と此地
の人と交際を始めたのが始まりで、其又交際といふの
が大概は戦争即ち武器を以て争闘を始めたのから起る
か、又平和の戦争といつて刃器は合せないけれども
智慧の較べ合、平易く申せを賢いものと愚なものと腕試し
から起るので、世の中へ優れたものが勝ち劣つたもの
が敗るといふ大法があつて、若し此戦争は勝つた方があ
れば、直に敗つたものを自分と全じ様にして仕舞う、即

客に下り四方は招
會する各々三千人
と士又下るの至り
之れは趨り者多き
を云はんと欲する
あり夫れ士多きを
云ふ可なり其の三
千を言ふ之を増す
あり四君子を好む
と雖とも士の至る
衆しと雖も各々三
千餘人又過さず書
則ち三千を言ふ夫

ち自分と交際をさせて自然々々言語までを自分の方
のへ化らせて仕舞をするから、其處で先づこれ迄異つ
た言語も一つ消えてゆき、又其先のも一つ消えてとい
ふ風も、異つた土地の人々が聚つて来る又隨て異つた
言語の減つて来るの自然の理でありまして、如此よ
腕試べをする間には随分勝つともあり敗るともあり致
して年を過ぎましたから、或は甲の地の言語が乙の地
の言語と混つたり、又甲の地と乙の地と丙の地との言
語が混つたりして、終に今日の様は世界中の言語が幾
種も定まつたので其証據は太古から甚く遠い、とか
距れて居たとかで、他の土地の人々と腕試べをしあか
つた國々を今もあつても依然固有の言語を用ひて居ま
するし、之と反對で歐羅巴をぞのやうに、彼地此地の

れ言葉も必ず千數を言ひ言少をけれ心則ち一無を言ふ世俗の情事を言ふの失あり

人々が敗たり勝ったり聚ったり離れたりして種々の交際をした方では、假令今日の如く英吉利、佛蘭西、獨逸、埃太利などと判然國は分れて居ながらも、又言語こそそれく違ふて居るもせよ、何處やら似たやうな言語でありまして、若し始めから少しも變らなかつたのならば其様も似る所以もあくて、恰も日本語と英吉利語との様も全然違ひさうなものでござりませんか、而して又今日でも此様も幾種か異つた言語のあるのも、古代の野蠻人が優れたものも勝つたものもは敗るの道理で、漸々と團結つたのが英吉利とか、佛蘭西とか、立派な國もあつたので、いろくくと混つたり變つたりした結果も、その國々の國語と定まつたのであるから、是れ全く古代の紀念と申さなければなりません

却説言語あるものは此様に出来て此様に變つて参りましたが、然らば今日の如く世界中往來を致し、種々異つた人々と交際をする様もありましてから之直も一種の言語とあつて仕舞さうなものでありませぬけれども、決して左様を譯すと参りませぬ、何故をれば今日もしてこそそれく獨立の國が、それく自國の語を用ひて居るのでありますから、今一つ世界に大亂もあつてそれで世界が今の一國の様に團結つて仕舞へを格別、左もあければ其國々の中で用ひて居る言語を變へて一様なものにするなどといふとは出来ませぬ、若し又其様あとが出来た國がありましたらば、それは布哇のやうな人數が寡くて外國の人を澤山入れねをさらぬや

う亦國で據るなく英語あり佛語ありに染つて來ので、
 もありましやうか。其代りよと各國往來をする上よ於
 て、假令日本人でも英語を知らねばならぬといふやう
 ん、商賣あり學問ありに優れた國の國語は他の國々の
 人々に習これるし、何事も取り所のない國の國語と他
 の國々の人に習はれませんから、矢張國語の戰爭とし
 て居るので、此戰爭と世界中で最も事物に優れた國の
 勝とあるのでありまして、其國語の手廣く世界よ流行
 る程其國の何彼も優れて居るといふことを知るとが出來
 ます

諸君よ、御覽あさい、今日彼の如き商賣の盛なる横濱
 、神戸、長崎等を、數多の蠶糸、數多の茶、其他種々
 の品物と日々外國人の手よ渡るか又よ日本の外國輸出

商の手を経て、世界の何處へ送るのでありましやう、
 而して又此等の貨物を買入れまする國々よ日本よ對し
 てと何でありましやう固より一處か二處か賣る斗りの
 蠶糸あり茶ありとありませんけれども、蠶糸の賣れ
 るのが佛蘭西か亞米利加が最高でありまして、茶の澤
 山よ參るのが露西亞だとか申して、此國々は日本よ生
 産る蠶糸あり茶ありを買込んで自分の國の人々の需要
 よ應じますから、是れ即ち我日本の産物であるところ
 の蠶糸の顧客茶の顧客と申さねばありません、又諸君
 は日常肌よ着けてお出される毛織物の類や、頭に戴
 いてお出される帽子なども、今日でこそ和製と申し
 て少しづつ、は日本でも製へまするが、其元何處の國
 から輸入したのでありましやうか、皆是れ獨逸あり佛

蘭西あり英吉利あぞから参つたのでありまして、日本の人が衣たり冠つたりする用を足したのではありませぬか、シテ觀れを日本と彼國の帽子の顧客、毛織の顧客であつて、輸出と云ひ輸入と云ひ畢竟日本内地の商人が諸種の貨物を賣買するのと同じとて取引をして居ると云ふのに相違ありませぬ、然すれば此取引をとするは互に談話應對もせねをありませぬ、又は書翰の發受もせねをありませぬ、勿論日本人同士の商賣あれを、我々が生れてから自然に覺へた國語で澤山、我々が日常書まする文字を綴つたので事は足りませぬやうけれども、假も言葉の異ふ國文字の異ふ國同士で觀れば此方が彼方の國語を知て居るか、又は彼方が此方の國語を知て居るであければ、満足を取引を爲る

とが出来ませぬ、否其れ而已ではなく、商賣もと商機とて大切かとありまして時よくの駆引もあるものですから、彼方の國狀も人情も知らず又之貨物の相庭も知らぬ様で、此方に大きき不利のあると申すまでもなく、究竟肩を並べて交際をしてゆくとが出来ませぬ、此損此恥を贖ふは進んで彼方の國の狀態を察るとよ心を傾け、彼方の書物も讀まねばありませぬ、隨分彼國の新聞紙類も看ねをありますまいが、借而之を致すにも專要あるものが彼方の國語を知らねをあらぬといふと、之あかつた時は何程心を煎らましても、足を挺櫃ましても意ふ如くはありませぬ、然らば假又は商人とあるからには、自分の商賣の顧客々々の地を考へて其地方々々の國語を覺へて

、それで自身而已であく大日本國の不利とあらぬやう、貨物の賣向のよいのを考へあざして精々利益のある様に勉強せねばならぬものを、今日の商人が動もすれを、異人が日本語を知て居るから彼地の言語をぞと知らなくとも宜しいとあざと迂闊々々して居るのと實に慨かましい限りではありませんか

諸君よ、諸君と又今少し眼を刮げて今日の我國の狀態を御覽あさい、僅かよ二十年の昔時よは想像も及むざりし諸々の器械諸々の智識が日本全國に充滿たのと、抑も何れの處から收受たのでありませしやう、是れ皆西洋の文明國が我々に齎らした御土産ではありませんか、現に今日の如き規律が正しくて生徒又便利を風を學核あざと、未だ二十年前よ一つもあかつた位でありませ

して、諸事物々驚くばかりよ進んで參つた其根本と、固より西洋人の所有て居たのを取たよは相違ありませんけれど、之を取るよも何より肝腎なのは彼方の國語を知るとであつて、若し彼地の國語を讀み且談しするとが出來あかつたならを恰も啞が旅行をするのも全様でトント寶を看あがら手を拱ねて居るのでありませしやう、何としても彼れ西洋人の智識を奪ふとは出來あかつたであらうものを、凡そ理解力のある人間にしてと此様のとの了解らぬ道理はありますまい、故に今日少しく高尚ひ學問をするよと必ず英吉利あり、佛蘭西あり、獨逸たとか、以太利とかの國語を覺へて居ねむからぬといふのも、彼地の人の書物を読み講義を聞あざして彼土の智識を此方よ取るのでありますから、

隨て前も申上ました國語の戦争即ち平和の戦争よこ
 日本人が充分西洋人に敗けて居のでありましやうか。
 若し今日の形勢が一變して曩に徒弟であつた日本人が
 師匠の西洋人を教へるやうにありましたならば、取不
 直日本人が言語の戦争に勝つのでありまして、英吉利
 の彼のキャンブリッジの大學であらうが、オクスフ
 ナードの大學であらうが、日本語を知らなければ學問
 と出來ぬとあつて來たやうでありましたから、如何
 程嬉しいとでありましやうか、愉快なとでありましや
 うか、伏望一度は此様の目も遭ふて見たいもので
 ありませんか……しかし其處迄進むよと彼方の智
 識を根から葉から末の末まで取込まぬとに於ては致し
 方がありません、から皆それ、入用の言語を習得う

て學問を修め商賣を勵みして利益を獲るとも勉強する
 のが専一でありますから、諸君は能く、此邊は注
 意して、言語の戦争の勝敗を忘れぬやうなさらねば
 ありません
 却説、言語あるものが生地のであらうが外國のであら
 うが實に大切なものであるといふとは右述べましたと
 ころで御了解ありましたで御座りましやうが、之に
 付て直ぐ續けて述べねをあらぬものが、文字と文章と
 でありまする依て更に第二回として論ずることを致し、
 今それを述べる迄は諸君の御注意を願ひたいものは、
 俗といふ訛言であります、此訛言あるものと全に國內
 と住で全に國語を用ひながら、何處も得て有うちの
 もの、否免れぬとでありまするが、凡そ此程又人の品

位よかゝるものはありませんで、幼い時分から念頭に掛けて正しい言語を用ひるやうにしなさいと、之れが慣習とありまして、容易に直らぬところがあるものです、尤も近來は交通の便利が開けて東の隅から西の隅まで人々の交際が繁くなりましたから、漸次訛言が滅消るではありませうやうが、此訛言が人の心よ浸染ンたが爲め又大變を間違の出來ると、實よ可笑しさに堪ヘン位でありまして今一例を東京の如き繁華の帝都よ取て見れば、東京では凡て「ひ」といふ音を「し」と訛りますのは、御存知のとて御座りませうやうが、それはホンの口頭計りであつて、心中に「ひ」といふ字だと承知して居りさうなものと思ひの外、著者が時々失笑したのは、床屋の看板よ書いた文字であります、其看板よ「しげすり

二錢」と記してあるので御座います「ひげ」といふことを眞音であるのみ、それを又文字よ書くよも「しげ」とするやぞは、此れ畢竟訛言であると知らぬらでもありまするが、少しく心掛のある人の爲なさいとて御座ります

第二回 文字、文章

◎シェルリング曰
 く凡そ文藝の作
 必ず二質を以て成
 る即ち
 其一と作者の意
 を用ゐて裁理調
 整せし部分あり
 其二と一氣呵成

諸君、文字とは何でありませうやう、文字は言語あるものがあつて、人々が思想を表はし意志を告げる上よ於て、口頭而已では如何よも不便である、チヨイト遠方へ音信をするよも一々使の者よ言合めねをせらさず、又人々の間で如何ある大事の約束が出来ても其事を徴し置く致し方もなし、殊よ此人間の世の中に出來る事有る事を後の世よ傳へて置くとも出來ず、此他の不自由を斷べ立たせらるる數限りのさいとて……此様なとて

して浩然として
自ら已むこと能
はざるが如き節
分あり

夫れ作者用意の處
有り故に前後井然
として極めて次序
あるを致すあり又
作者自ら其の然る
を知らざる處あり
故に意趣活然とし
て極めて生氣ある
を致すあり故に若

は如何も困るから、何か符號を拵へて其符號で人々の
思想と表し意志を告げるとよししようとして出来たので
ありまするが、借而此文字が出来てから人々の便利を
獲たと、後の代に利益を貽したとは如何程か計られま
せん、然れをこそ支那の古代未だ文字のなき頃でさへ
も、結繩の政とか申して、彼様此様と口で傳へるべき
事を繩の結び方で知らせたともいひ、又西洋でも埃及
といふ國と餘程古くから開けたもので、其初め形象文
字として、物の形狀を畫ねて言語の音を表すことを發明
し、それが漸次變つて參つて今日のABC即アルハベ
ットとあつたとも申して、今猶此様の形象文字を彫つ
けた石などもあるとも申し、又我日本でもいろはを以
て始めたやうも、孰れもせよ此文字あるものゝ大切

し夫れ此の二者中
其一を欠くときは
以て神品とあすよ
足らざるあり
◎羨襲曰く 文章
は人の言ひ易き所
我れ寡く之れを言
ひ人の言ひ難き所
我れ易く之れを言
ふ
◎シエルリング曰
く 文藝大家の作
は就て其神品に入

あとは疾く知つたのであります
然らば文字あるものと如何なる風にして思想を表はし
意志を記したかといふも、全しく文字ではありながら西
洋の文字の用ひ方と支那の文字の用ひ方とと大きく相
違ひがあります、又我日本とも異つて居る、今先づ支那
と西洋との異ふ點を擧ますれば、支那では鳥をあらわす
といふ字で「ヤント」一字定めてあつて此字と最早離す
との出来ぬ様にしてありまするから、簡短に申さむ鳥
といふ物があつて、其鳥ある物み而已附九字を定めた
ので「とり」といふ語があつても持へるとの出来る文字で
あるが、西洋のは之と反對で「とり」といふ言語から出た
字であるから、其「とり」といふ語があつては解らぬ文字
、即ち言語の方で「とり」と稱へることを知らねば、文字を

るのを観察せむ其
中必作者の明か

に自ら其然る所以

を知りて乃ち巧み

を用ゐし所と作者

の自ら其然るを知

らずして乃ち所謂

天籟なるものと混

融化成して一体を

相爲して分離す可

らざるものあるを

見る然れども若し

夫れ名家と稱する

看ても「とり」のとだと合點の出来ぬ風は出来てある、其
實例を擧げれば

英語にて

バード

此れに英語の音を日本字にて表したるもの

日本にて

とり

英文にて

Bird

此文から「メード」といふ音が出でるやうな「メード」と
「とり」との四字を合せたるものにて若し此四字を離す
か又そ一字にて「メード」を取去らば「メード」と「とり」と
り」といふ意味もなきなり

支那語にて

チャウ

此れは支那語の音を日本字にて表したる者

日本にて

とり

支那文にて

鳥

此文字を「チャウ」と讀みて聽すとも出来ねば又「チャウ」
と讀まずとも「とり」といふものより外に用ひぬ字ゆへ
「とり」といふ物の代りに拵へた字で「チャウ」といふ語の
代りに拵へたので是等其故を此字即ち「鳥」といふ一ツ
の形状をありながら「チャウ」といふ音を何故は出るかわ
からず

右の如く英語でと先づ「バード」といふ語を鳥を指すもの
と定めて其「バード」ある音を拵へる爲めは幾個かの文字

み過ぎる者も至り

ては未だ其能く此

に至るもの有るを

見ざるあり

◎祖盤曰く 文章

須らく自ら機軸を

出だして一家の風

骨を成すべく何ぞ

能く死人と共々同

しく生活せんや

◎本居宣長曰く

歌よまれ詞にまれ

「てよを」との整は

を聚めたので、恰も日本で假名を用ひまする様も支那

字の「獸」といふ一字を「けもの」と書くのも全じ理であるか

ら「けもの」を見て此れを「けもの」と稱へるといふ音をしら

ねば文字も書ませんけれども、支那の「獸」といふ字を

へ知て居れば彼動物は何と稱ふもの即ち語の音は如何

だといふことを知らずとも書けるのであります

西洋と支那とをまづ此様の相違がありまざるが、偕て

日本とは如何様も違ふかと申せば、此れを諸君御存知

の通り、日本と中古から支那文字が輸入して來まして、

それから種々と文字の用ひ方も變りましたけれども、

究竟今日の處では日本固有と申してもよい平假名と支

那の字と錯交て用ひて居るのでありますから、便利

と言へば便利をやうのものゝ、其實支那文字と其意味

ざるは譬へを拙さ
 手して縫ひたらん
 衣の如し其言葉は
 如何よめでたきも
 綾錦ありとも縫へ
 る様の悪しからん
 と見苦しからじや
 ◎蘇轍曰く 吾文
 は萬解の泉源の如
 し地を擇はずして
 皆を出づ可し平地
 も在て之溜々汨々
 として一日千里と

を覺へねむをあらぬだけが西洋の文字を學ぶのと較べて
 は非常の手數も相違ない、せめては言語までが漢語と
 交錯もあつて居だけで幾分か學ぶも容易と申すもので
 、又此言語のが漢語と定つたから漢字を用ひ隨て人々
 が漢字を學ぶねばならぬとあつたので御座りましや
 う、今更願へば随分御丁寧極まると申さねむをありませ
 ン
 諸君よ、文字あるものと此の如く西と東で違ふのみ
 ならず、又其用ひ方に於ても異なるではありませけれ
 ども、其思想を表はし意志を記すといふ目的に至ては
 何れも皆一途でありまして、若も之を分けを萬般の事
 も當て便利を缺くことでありませしやうが、此文字を使ふ
 て目的通りの用を足すは、此上も又文章を學ぶを分け

務は已れを現はさ
 ずして獨り其人物
 を現はすも在り若
 し其一身上の感情
 に注意を率かむ其
 興味忽然として消
 れ失せぬ可し而し
 て不結果は演劇の
 最中も上言の現こ
 れ幕引の出でたる
 と一樣なる其愉快
 を與ふべし故も諺
 曲作者の職務の一

ればありませぬ、何故とされを、既も文字あつて語を
 記したからとて、語と一ツ々々のものであつて、例へ
 る鳥といひ「飛ぶ」といふが如くに天地間のあらゆる物
 も名をつけ、又諸物の働きも名をつけたとは申せ其
 表とさうと思ふ意味を知らせたものでありませぬから
 それを綴りて一箇の意味を持たせるのは文章の役であ
 ります、即ち文章あるものは總て人の思想意志を意味
 通りも寫すものでありまして、例へば爰も一人の小兒
 があつて、其父が小兒を學校に遣うと思ふと、「汝」と
 いふ語と「學校」といふ語と「行け」といふ語を集めて、「汝は
 學校へ行くべし」と書くのが文章である、今若し之と反
 對で「汝」ある語「學校」ある語「行く」ある語を支離滅裂も
 して置くならば、此等の語と、唯物を指し働きを指す

雖とも難おし其石
 山と曲折する及
 びて物又随ひ形を
 賦して知る可らざ
 るかり知る可きの
 所のもの常又當さ
 に行くべき所に行
 き常又止ざる可ら
 ざるに止む是れの
 如きのみ其他吾れ
 亦知る能とす
 ◎マコレー曰く
 蓋し演劇作者の事

だけのものであつて、決して談話の意味を持たぬものでありませぬ、故に文字を知らぬ其と共に文章あるものを學ばねをあらす、又文章を知らぬを文字の目的を達する事が出来ぬ所以で御座ります。然らば文字は語を表し文章と文字を適當又排列べて以て談話の主意を人々告るのでありますから、これよこそそれの法即規則があります、其規則を學ぶのが即ち文章學であつて、又一は文法學といひ其書物を文典と呼ぶので御座ります、然るに此文章學又就て日本と西洋と少しく相違するところある所から大に誤解するところがあると言へませぬ、シテそれと何かと申すに、西洋でと言文一致と申して、人々が談話をするのも之を文章とするのも同じ事である、即ち規則通り――

切願みる所あく己
 れの感情よ己れを
 放任するも在り

文法に違つて――談話をすれを其儘文章である………
 言を換へて云へば談話が文字に現れれば直に文章とあるのであるが、日本では從來談話をするの文章又書くのと全然異ふて居て、今日でも猶「豈」とか「蓋し」とか「べけんや」「ざらんや」などの文字でなければ文章でない様も心得るところでとなく、左様と斷然定めて居る位であるから、今著者が言ふ文章あるものと大い意味の違ふ點があります、此様の事は餘り紙敷を費さずとも、以來諸君の御實験もあるとお預け申して置て、他の肝腎のお話に移ると致しませう
 却説、文章あるものも法のあるところと只今述べた通りで御座ります、此れと固より左もあるべきとで、英

語をぞは其國の人でさへあれば概ね自然に慣れて居て
 滅多に規則に違ふ人も無らうかと察される位でありま
 するが、此外に面倒なのが「脩辭法」又は「美辭法」をぞとい
 ふものであります。此れが何様やら支那や日本で
 申す文法といふものの中又籠つて居るかのやうと思は
 れます、依て今少しく此事に就て述ましやう
 脩辭法とて其字の如く、辭を脩めるの法即ち巧み談話
 巧に書く法でありまして、約めて言とい辭を奇麗にす
 る仕方でありますが、此れ亦最も文字の目的を達す
 るに強い補助を與へるものであります故、何かと言へ
 ば凡そ文章あるものと自分の思想意志を表はし記すと
 共、又充分に其主意の他人に通じる様、詳しく言と
 い其意を紙面に表とした爲め他人が充分に感動する

やうに排列ねるとが肝腎であつて、若し文章が此れと
 反對で光澤もさく綾もさかた時は、宛も木屑を囃
 むやうに興味も何もなければ、百年千年後の代に孫て
 人々の感動を起すともさく、何程事實が悲しくとも又
 面白くとも、涙も出なければ笑一つ出も致しませぬ
 が、今日も古來の名家の文章を誦で、喜び又怒り哀
 しみ又は樂しむといふもの之、畢竟辭を奇麗に列ねる
 とが巧練から相違ありません、すれを凡そ人間を
 るもの、感動といふものあつて、他事ながらも、我事
 ならずも同情の爲めに悲しみ又は喜ぶ性のある間は、
 文章を以て人々の同情を誘ひ、看る者をして殆ど自ら
 文章中の人あるが如き心地させ、又は現狀躍然として
 紙面又顯はれるが如き思ひさせると最も妙の處であつ

て、亦萬般の事も多分の利益があると存じまするから、是れ亦文字の目的は協ふた最も取るべきことと斷言致しても過言でとありませぬ、諸君若し文章を用ひやうと思召したあらば、先以て此點は心を注がれると著者の深く冀ふところで御座り歟

第三回 數學

◎ボツクストン曰
 く 我れ他人より
 一倍の光陰を用ひ
 一倍の勞苦を爲せ
 ば必ず他人の成せ
 る事業を成し得べ
 し

諸君、凡そ天地間も形跡を具へて居るものとして「數」の
 さいものはありませぬ「數」と人々が物を觀物を量る
 ところの標準でありまして、苟くも物跡は長い短し、
 廣い狭い、厚い薄い、多い少いがありまする限りは一
 日も無くて協ふぬもので御座りませぬやう語を換へて言
 へば、此「數」あるものなくして、長い短い多い少いの比
 較も立たねば、隨て萬事に不便極まることで御座りまし

やう、然ればこそ人々が一二三から千萬億までの數を
 拵へて總ての形跡ある物質を量る用とあした而已であ
 く、又之を形跡のさい「日」とか「月」とか「歳」とかいふもの
 まで當て算めるとと爲たのでありまして社會が進歩
 すれば進歩する程此「數」を用ひるとが殖ねて止みませぬ
 、然り既も「數」が事物を量るの標準とありましたから
 は、隨て此「數」あるものを計へるの方法及び或る「數」から
 出るところの他の數を看るとの方法があつてはありませ
 ぬ、是れ即ち本題として掲げたる數學あるもので
 ありまして、これより著者が少しばかり辨じやうとす
 るところのもので御座ります
 例へば此處は幾干かの林檎があります、シテ此林檎が
 何箇であるかといふと人々が數へ得るところであり

まして、「數」といふものを知り居る上よ於て之別段難かしいとありませンが、然らば其數が百個あると定めて之れを貳十五人分賦するは一人前は何箇づと與へたらを好いかといふとにきると、取不直數學の法よ依て除るといふ術を用ふるとよある、仍で一人前よ四個づと與へれを過不足がなきとが知れて、而して其通り相違あかつたといふやうよ、加へるとから減くとから乘ると除ると、此四ツの方を以て如何なる難かしい算用でも出來て實地と違はぬのが即ち數學の目的であります此等は諸君よも疾く御承知のとであつて、凡そ人として簡易な數學を知り居らぬものは自然なきいと申しても好い位でありますが、此算用するに暗算ばかりではいけませんから、日本では珠算を用ひ、西

洋では筆算とて、數字を書て加減乗除をするよあつて居るから、一應見た計りでは大變よ違ふ様ですけれども、違ふのは道具計りのとで算用の理よ異點のある所以となく、又理が異つて居る様で之數學といふものが正當な算用をするよ依頼にあらぬものと言つても宜しいでしやう

諸君は「數學」よ付て之最早何程か御稽古あされてあるから此様の例は申上ずとも御存知のとである、故よ著者は細々と述べるよは及ばず、唯々算用といふものは凡そ如何なる人よも知らぬをあらぬとであつて、而してあかしく口で言ふ様を容易いと而已であく、チヨイト手細工をするよも又家を建てるよも一枚の田地を測るよも之れを知らずしては出來難いものであるから、人々

の爲るとの難かしくあるに從て數學も漸々難かしく
 ると述べるだけ止めて置まじやう
 然らば「數學」あるものを以て人間社會に出來ると又人
 々の爲るとの用を足すには唯々數學を以て紙と書き又
 と珠を彈ひて加減乗除をするにかりで好いかと申す
 、決して左様ばかりでは間似合ません、假間合ふた
 ところが大よ不便であります、故に數學は普通左の五
 ツに分つて各々其用を爲すに於て居ります、即ち

- 算術
- 代數術
- 幾何
- 三角術
- 測量

でありまして、算術とは普通人々の用ひる算盤又は數
 字を以てするもので、代數とは數字の代り文字即ち
 ABCなどをを用ひて一々數字を排列べたてる煩を省き
 而して求めるところの數を敏捷に見出すやうにしたも
 の、又幾何とは物跡の面積又は一部分の長短廣狹等を
 圖に依て迅速に確乎と知る方、此他三角術測量を皆
 算へんと欲する物の類に依て各個別々の妙を持って居る
 ので御座ります、故に人々皆己れの職業に依て此等の
 一ツ又は二ツの術に精しくかけれをかりませぬけれど
 も、先以て如何ある人々でも一般知らねをやらぬもの
 が算數術であります、且亦代數にせよ幾何にせよ此算
 數術を知らずして其目的の數を見出すとの出來ぬも
 のでありますから、算數術は數學の目的を遂げるに

最も肝要な最初の術で御座りませう
 諸君よ、著者と今一應例を引て數學の人生に必要と
 を述べませうが、彼の大工を御覽なさい、彼の桶職
 を御覽なさい、又商人の帳簿あるものを御覽なさい、
 家を建て桶を造り又は商賣の勘定を致すに、最も大切
 なもの何でありませう、鋸も要りませう鑿も要
 りませう又筆も要りませう墨も要りませうが、
 獨り數學があくては此等の諸道具といへども更其用
 を爲しません、看られよ、何程鏡器を以て木を伐り木
 を削つたところが、又は何程結構な筆結構な墨を用ひ
 たところが、此れは何間何尺にして彼れは何間何尺に
 して組合せるから何程の句配がつくといひ、此れ何
 斗何升を容れるやうなせねむからぬから、高さを何程

もし内徑を何程にする、隨て搏を何程と何程に取るか
 どといひ、又は何程の元仕入をして何程を賣て、此れ
 で何程の利益があつて、而して今日の総勘定が如此々
 々といひ、皆是れ數學の算用法から出て来るものであ
 りますから、諸々の道具は多く數學あるものゝ命令
 次第で働いて居て始めて家が建ち桶も出来又帳簿の目
 的を達するとも出来るのでありませんか
 諸君と又、仰いで天牀を御覽なさい、晝間赫々と耀け
 る彼の太陽を初め、夜間皎々と照り渡る月及び數知れ
 ぬ星の輝々と光を放てる、固より皆吾人々類の手の届
 くところでもなければ又音信を通じ得るところでもあ
 りません、然るに世の理學者は吾々を教へるに、太陽
 の大サ幾許々々地球と比べて何倍と幾許とかが、月と地

球との距離が幾許里であつて其大サは幾許、又は何星の大サと幾許あつて地球と幾許里距れて居るとか、一々精密しく擧げたのと、全躰何でありまじやう、是れ皆測るべき方を以て數學上より出た數を申したものであつて、決して繩張をしてボツ々々と測つた仕事でもありませぬ、否未だ雲に棧橋の發明のあい間と左様さとの出来る筈はあいのであります、果して然らば「數學」の獨り物牀を手近又持て二片あり三片ありの長短廣狹厚薄深淺を量つて後他の數を求めると已である、又能く其理を推して遠々纒かみ見へるだけの物牀をも測定るとの出来るものであつて實に莫大の功力のあるものと申さねむありませぬ

右の著者が諸君に唯一二の例を示した而已の事であり

まするけれども、猶「數學」の大功あるとは充分に証するところが出来まじやう、然るを動もすれを世間の人々が僅に四則即ち加減乗除を覺へた位で直に何事も足りるもの、如く思ひ、深く究めるのと數學家の職業とをかり心得るは、大なる誤謬でありまして、階級の上下を問はず、職業の何たるを拘はらず、可及的深く數理を究め及び其術を迅速に行ふとを學心ねを、事又當り物に觸れて大に不自由を覺へるのみならず、其事其物を首尾能く仕揚るのよ非常の支障を來し、隨て生涯の事業を意の如く發達するところが出来ぬやうなともありまじやうから、吳々も諸君の注意を喚起して置たう存じます

第四回 地理學

地理學と地球の表面にある陸地と水とを顯はれて居る諸般の形象と、其中に住んで居る人及び其産物に就ての知識を得る學問でありまして、人若し此世に在て生活せんと欲し、他の人々と共に幸福を得やうと思ふたならば、其區域の狭い廣いは兎も角、多少共知らねばあらぬとでありませぬ。況して中等以上の人々にして特に世界の此處彼處を眼を配るよと最も大切を學科でありまして且大なる業務の進捗を助けるものと言ふねばありませぬ。

諸君よ、地球よと山もありません、又川もありません、平原もあれを海洋もあり、隨て地峽、海峽、港灣、湖池、其他種々を形態をなして居る陸地と水とが澤山ありまするが、苟も人類が住んで居る限りよと、都府もありません。

しやう、村落もありませしやう、而して之れ又通じる通路もありませしやう、田もあれば畑もあり、隨て諸般の製造場もありませしやうから種々の生産物もありませしやう、故に又海や川も船を泛べて貨物を運搬輸送する水路もありませしやう、此等と皆地理學の教へるところでありまして、今若し誰でもが旅行をして世界を周遊することが出来るものならば、親しく其處を視、親しく其物を知るとでありませすから、此れ程善い事とありませんけれども、何程便利であるとは云へ、此廣い世界を遺漏なく一周するおどの事は些と出来難いのみならず、人々若し其様おとばかり又歳月を費して居た分にと、到底一生の職業を果すおどと能くぬことでありませしやうから——尤も何か専門の學の爲め其れ

而已で遊歴する人はそれで宜しいが——茲も居ながらにして世界を知り、其たの場所と人々の生活鹽梅其他の事を心も想ふとの出来るやうにしたのが即ち本題に掲げたる地理學の要であります

然らば地理學あるものは何故に學ばねむらぬかと言ふも、其所以はあかく一ツ二ツの事でもありませしければ、先づ卑近の處から申せむ、前以て緒論も申した通り、人々が相集りて家と成し、村を成し、郡縣とあり又國を成すも當てと、其土地々々に依て生産るものと生産ないものとがあるも相違ない、之れを例へれば北海道又は魚類が澤山獲れるけれども氣候が寒いから米穀が足りない、すると又攝津邊は米穀は澤山生産るけれども魚類が足りないと致しましやう、此場

合も當て起るのが交換でありまして、一方の餘剰のある物を他方へ遣て他方の餘剰のある品を一方に取るとが始まる即此兩處の間は商賣が出来る、然るも此れが接近を處同士あらむ間斷なく往來すると出来るから宜しいが、若し亞米利加とか歐羅巴とかいふ遼遠の處と取引をするにありますと——否現在爲ねむらぬのでするが——何分もチヨイト往つてチヨイト還る譯も参りませんから、自然先方の土地も知らず人情も知らず、一向不案内で貨物を送り出すとあるかも知れません、而して若も此様の事があつた時と果して利益でありませしやうか不利益でありませしやうか、言ふまでもなく、或は全品物でも不向だとか、又は途中で赤道直下の熱い所を通過つたから、其豫防がし

てあかつたので腐敗ツたとか、種々面倒あとか起ツた
 爲めよ、固より利益と相違のさい貿易が不利益とある
 ともあるでしやう、此等と皆先方又と先方へ往く地理
 と人情とを知ぬからであつて、全く地理學を學ばあか
 ヲたからの損害と申さねをありません、況して商賣を
 るものは機又投じる——即ち時機を外さぬ——とが肝
 腎であつて、未だ見たとのさい國であらうが、又往ら
 たとのさい土地であらうが、一片の電信一行の新聞で
 も何品が拂底だとか何物が値が貴いとか聞けを、進
 で貨物を送り求めて取引をせねをあらぬとの多いので
 すものを、其時に當つて地理人情を知ると知らぬとの
 相違は何程か知れません、是れ即ち人々が居常地理學
 を修めて置かねばあらぬ一ツの理由であります

然るに右述べました例は唯々一の商業の點から申した
 のでありますから、僅かに地理學の必要ある一斑を
 知らせる而已でありますけれども、世に既又今日の
 如く開けて參つて、世界萬國の人々皆諸般の交際を致
 し恰も内國人も同様な状態よ、相互の生活を立て相互
 の幸福を圖るととありましたからと、何から何まで外
 國の事情他處の模様を知ると知らぬよ由て大なる利不
 利のあるは申すまでもなく、亦一々擧げるよも及びま
 せん、故又地理學は其種類數多ありますするけれども大
 略左の如き事件を悉して人々の智識を促して居るとで
 あります

一 自然の分界

即ち五大洲といふが如く又五大洋といふが如き

天然の分界の立て居るものを云ふ

二 丘、山、谷、平地、小川、河、源島、半島、地
峡、堤、池、湖等即ち地球上にある諸種の天然
の形状をいふ

三 人為の分界

即ち人間が勝手に畫したる境界にて之れを政治
的の境界とも云ふ、例へば佛蘭西と呼び獨逸と
いふが如き、獨逸と獨逸の獨立の權利を以て自
由に自國を治めて居り、佛蘭西は佛蘭西の獨立
の權利を以て治めて居る故に、之れを一括す
る事が出来ずして茲に國境が出来り、是れ
即ち人為の分界であつて天然の分界とは大に違
ふところす、且亦國の中には洲とか縣とか群

とか市、町、村とかいふものを小別して政治の
便利をやうよしてあるから、此等も亦人為の分
界と申さねむあらぬあり

四 道路、水路

即ち陸の路水の路にて、車馬の便舟楫の利あり

五 國內廣袤、人口及各洲、縣、郡、市、町、村、
の廣袤人口等即ち一國の廣袤、人口を始めとし

其の中の小區域の廣袤、人口よ及ぶ

六 政体、文物、風俗等

即ち一國を治め一洲、一縣を治め一市、町村
を治める制度、例へば王國とか帝國とか共和國
とかにて、治者と被治者との關係は如何とかい
ふこと、國內の文明即ち諸般の人事は如何ある

鹽梅だといふと、及び住民の人情、風儀等をいふ

七 生産物及其産出概額

即ち國內の處々方々よて生産る貨物、及び其貨物の生産る數額をいふ

右の地理學よ於て修めるところの種目の概畧を掲げたのでありまするが、諸君と此れを見て充分地理學の必要と、詳しく言へば諸般の事よ就て地理學の利益のあるところを御推測おされましやうから、最早此上よ贅言を費すにも及びますまいと存じます

第五回 博物學

諸君よ、吾人が生活する地球には吾人人類の外如何なるものが生息して居りましやうか、又彼の根あり幹あり

◎シル曰く 畑は麥を生ずる具あり

麥は麵粉を造る具あり麵粉は麵包を製する具あり麵包は飢を充て生を養ふ具あり而して茲に至りて其の具の用止む飢を充たし生を養ふと他物を作爲する具に非らずして自己の爲めよ要することおければあり實物課と各科學よ進むの初

り枝あり葉あつて、自然よ生長し、花開き實を結ぶもの抑も何でありましやう、然るよ是等は皆動くも動かぬとの區別こそあれ、等しく生命のあるもの、様に思はれまするけれども尙此他に生育つとも見へねを死ぬるとも思へぬ一種の天然物がありまするが、之れ亦何でありましやうか、而して此三種のものよ吾人人類が日要の器械器具のやうよ吾人が發明したものでもおければ又人間か爲で製へ出したものでもおかい畢竟吾人が目を以て視るまでよはや其形跡を具へて居るものでありまして、之れを稱へて天然物、又は自然物と致します

諸君は一たび山よ跨り野を過り河を渉り海を踰り或は地中を掘鑿ちあせして、其處よ在る諸般の物跡を一臆

歩として殊に博物學及び理化學も必要あり

あさい、手又と足を具へて地上を歩行し又は木を攀る
 獸類、身も羽翼を有て自由な空中を飛び廻る鳥類尾鱗
 能く水をかきて海河を游泳する魚類、或は足ありて地
 上又は水底を爬行し又と飛歩く虫類、之等皆吾人人類
 と同しく不完全なからもお粗末ながらも、種々の機關
 を具へて居て、飲食は口よりし、胃腸を以て之を消化
 し、肺臟膈又と氣孔から空氣を呼吸し血液体内を循環
 して其力を付け、知覺神經もあれを、運動も備ふる筋
 骨もあり、而して其体の内部から生長し其生命を保ち
 、同類を繁殖すと恰も人間の如きもの、名けて動物と
 申します、又彼の四時色を變ぬ常緑樹、冬來つて葉の
 落る落葉樹より、米麥の如き穀物を實らして年々枯れ
 るが如き草莖時を定めて花を開きて諸色人の目を歡む

しむる草花に至るまで、固より動物の如く自ら動く
 は出來ずとも、猶能く種々の機關を以て生命を保つと
 、詳しく言はば、根又因て飲食し、葉を以て呼吸し花
 に因て種子を生じ、空氣と水液を枝幹に吸収循環し其
 体の内部から生長して、動物と全しく同類を繁殖すの
 性あるもの、之を植物と稱へます、又此地球を構成て
 居る諸物即ち石の如き金の如き、唯全に性質の物を積
 み層ね又は附着て大きくある而已、其体に於て區別し
 て觀るべき機關もあければ、生死の變もあきもの、之
 等を括めて礦物と稱へます、而して此動物といひ、植
 物といひ、礦物といふものと即ち吾人が生息する地球
 の表面及び内部に在る萬物の謂でありまして、此れを
 學ぶのが本題と掲げましたる博物學と申す學科で御座

ります、故に著者は博物學あるもの、要とするところを繰返して

博物學と地球の外面及び内部に在る萬般の自然物を辨へ識り其異同を區別する學問であると定めて置まして、再び其種類を繰返して

博物學に於て學ぶべき自然の萬物を類別して、動物

植物、礦物の三種と致し、其中動物植物の二種は生命を保つ機關を有て居りますから、有機体又は有

生物と稱へ礦物は生死のあいものであるから無機体又は無生物と稱へる

と大別して置ましやう、是れ即ち地球の表面及内部に在る萬物の大分類でありまして、此大分類を始めとして其中諸物の性質、形状、功用等に依て可成的數多の

小分類をなし、而して萬物の性質、形状、功用を識るゝ便利で辨へ易きやうにするを以て博物學の目的とするのでありますから、最早此學性質に就ては著者が、啾々お話しするゝ及びません、故に今少しく此學問の功用を述べて、以て博物學の吾人に大切を所以を簡短に申上ると致し申しやう

諸君よ、凡そ學術あるものは、其研究する科目が何であらうが、其事其物が吾人の生活に必要であるから研究するのであつて、一として其主意的のあい學科はありません、語を換へて言へば、何學科でも人類の生活に必要なものばかりありません、故に今此博物學を修めるにも其通りであつて、唯奇妙な面白いといふ好奇の心を以てするものであつては知れ切つたところで御座

りましやう

然らむ、博物學あるものが吾人如何なる必要があるかと言ひ、先以て博物ある學科で研究する地球の外面及び内部に存在する萬物が如何に吾人に入用であるかといふことを質さねばなりません、即ち博物學で研究する萬物は如何なるものであるかを知らねをかりませ、然して著者之上來此學の性來を述べるに當て其物の概略を述べて置ましたから、今と唯僅か其例を擧げて説く而已と止めます

却説、諸君と先以て諸種の動物が人類の生活に用をさすことを最も眼前にあるところから御覽をさい、彼の犬の門戸を守る、牛の田を耕し、馬の人乗せ貨物を運び又は車を牽くなど、或は乳汁を以て人間を益するもあ

り、肉を以て食料と供へるもあり、骨と角も亦變造して人類の器具とあるもあり、皮毛を以て衣服鋪物とさすを得る等細かしく言ふまでもないことでありませすが、是と唯動物中獸類と而已就てのとでありまして、魚類の食料に必要あると鳥類の食料及び其形狀又は音聲を以て人間を楽しませると、之を擧げたからむ、實に數限りのさい程であります、故に今著者と其功用を數言と約めて

總て動物には四種の用があつて(第一)人々食物を供へ(第二)人の衣服の材料を供へ(第三)人の爲めに勞働し(第四)人の耳目を嬉ませ心も快樂を興ふと申しましやう、依て動物の功用は此れにて止め、次の植物に就て申さば、言多くして疾く諸君の御存知の

とをも述べ却て蒼蠅を避けん爲め、僅かよ左の數語を以て約めましやう

植物は其功用上から分て(第一)穀類(第二)豌豆類(第三)鹹果類(第四)蔬菜類(第五)蕈菌類(第六)海藻類(第七)果實類(第八)各用類(第九)用材類(第十)觀賞類とし第一は米麥の類第二と大豆蠶豆の類、第三と胡瓜南瓜の類、第四と午麥燕麥の類、第五と松茸玉蕈の類、第六は昆布石花菜の類、第七は桃梨の類、第八と椿桑麻藍等の染料紙料又と蠶兒の食料類、第九と樅杉等家屋の建築土工の用材とあすもの、第十は櫻海棠蓮牡丹の類よて、人々の觀て以て娛しむもの

先づ右の如く言へを餘と諸君の充分御推量あさるゝところと信じますから、直に礦物のとよ及びましやう

礦物の吾人よ幸福を與へるとは實に千萬無量でありまして、彼の金剛石の如き金銀の如き其光燦爛として人の目を射るもの、其質に因て或は寶冠指輪の如き裝飾物よ用ひ、又は貨幣として吾人の貿易を助けるを、最も功用あると金石土類の醫藥とあつて人の病を癒すもあり、又鐵の如きと諸君の御存知の如く其用の頗る廣いものでありまして、諸般の器具又は鐵道の如き築材とあつて如何程の功をあすか知れません、故に今一々之を舉げずとも、諸君の目に觸れる丈よても充分其功を知り其必要を覺り得るものと信じます
如斯述べ來れば凡そ博物學よ於て研究する諸科諸物皆各個別々の必要のあいはありませんで、隨て博物學の吾人よ必要あとも御了解よありましやう、況して

今日吾人が市場に於て看るもの即吾人が生活に必要を故を以て賣買をする貨物は、皆是れ其根元を此等の天然物に取つたものであつて、若し此天然物に缺けるとあるとか、又は其産出額が減つたとかいふ時に、其不自由の如何程でありましやう、隨て吾人生活上の幸福を減すと亦測られぬ程で御座りましやう、故に吾人之此等萬物の性質を究め、其生殖方法を發見して、或て肥料を供用し或て手を以てするあり、何れの途にも天工を助けて其増殖を圖らねをありません、今日世界の各國とも綿羊を飼ひ樹木を培養し又は土地に手を入れ肥料を與へて可及的多額の穀物を獲收れんとするが如き、皆此趣意を以てするにありまして、人類の作為力工を以て天工を助け而して吾人の用に供へるのこ

固より吾人の義務と申さねばありません、否社會の進化に從て人口も殖む、天然物の需要も亦愈々益々増すこととあれたる、吾人も亦止むとなく此點に力めねをあらぬので御座ります、シテ觀れを博物學の必要と他の諸學科にも増して、若し之れをくは吾人の生命をも繋ぐに差支へ假左なくとも充分の幸福を享けて以て天を樂しむとが出来ぬかも知れません、本論固より簡短に此學の性質と功用を述べたをかりでありますから、若し又此學に依て宇宙萬物の理を覺るが如きことと宜しく學んで後御了解あるとで御座りましやう。

第六回 地文學

地文學と之を簡短に釋いて、海陸山川の區別、風雨寒暑及び動物植物の異同、並に各地物産の種類等総て

地球の表面に就て論ずる學科でありまして、抑も地球の形状から運轉、四季晝夜の岐れる理由經緯度の事を始め、陸に在ては大陸、島嶼、山嶽、山脈、高原、平原、火山、地震あるもの、地上に災害を興ふる理由又水に在ては、泉源、川流、瀑布、湖水、大洋、波浪、潮汐及び湖流に係る事、空界に於ては空氣、温熱の現象、水氣の現象、氣候、光輝の現象、電氣の現象を此他地理上各地に分布せる植物動物の異同のあると及人間の種類の區別を各其理より由て證明し、其實を識るは皆此學科の攷究するところで御座ります、依て今諸君のお了解に便利あるやう此學科の支配する範圍を五部に分ちましよう、即ち

第一 總論 として地球の形状運轉を始め爾餘の部類

一体に關係を、即ち四季の別、晝夜之分、經緯度の類

第二 陸界論

第三 水界論

第四 氣界論

第五 有機體論

でありまして、總て地球の表面にあることを此れ丈に大別したのでありますから、何は何に屬すべきものであるかといふことを御合點なされるのと、其事に隨て諸君の概略御推測をされるところで御座りますから、一々申上るに及びませぬ
却説、諸君と随分不毛寂寥の地を旅行をされるともありましよう、又は時に水の外何一物眼眸に入らぬ渺茫

たる大洋を航海さされるともありませしやう、若し此時として途を失はぬもの方角を間違へぬものと定まつたものあらば宜しいが、萬一又左様のこのある時には如何よ致したらむ宜しう御座りませしやう、實に此の時に當て大切きのこと、先づ自分が地球の如何ある場所に居るかといふを知るとでありませしやう、而して之を知るに及ばぬとあらむ、隨て其場所から近い郡邑又と港を知るとも出來、隨て其方に向ひあり他の方へ轉じありして首尾能く旅行を遂げ航海を畢へることが出来るでありませしやう、然るも其自分の居る場所を知るといふことが如何にして出來ますか、是れ即地球の經度緯度あるものを畫いて、之を正確なる算數に合せましたから始まつたことでありまして、其亦經緯度あるものを以て地

球全面を割當たのも、地球が圓體であるといふと及其面積が何哩あるかといふとが定まつてから出たことでありませ、然らむ此等の事を論ずるのが地文學であるとして、以て當然地文學の利益であると申さねむありませ、是れ唯僅か又一例を示した而已でありませるが、凡そ是等の事から今日吾人の幸福を得て居るとは何程であるか量られませ、或は歴數とありて吾人より日時を教へ或は精確な圖面とありて人々の案内者とあること一々述べることも出來ますまい

諸君よ、又人として凡そ風雨電雷霜雪霧霞の物を知らぬとありませませ、然しおがら目唯其物を看るむかりでは何の用をもおしませ、能く究めて其理に通じおければありませ、苟くも此理を知り此事に通じ

たあらむ彼の氣象あるものを觀て暴風を豫じめ知ると
 が出來まじやうし明日の天氣が如何であるとも知ると
 が出來まじやう、此學の進歩が益するところ此の如き
 に至ると、實に能く造物を觀透したものであるといふとも過
 はありません

右は本題地文學の一斑を述べた計りでありまするが、
 固より詳しくとを申上げるのが本書の主意でありませ
 んから、爰又は此れで止めて置まして、本學に就て少
 しく諸君の御注意を乞はねばならぬとは、本學が他の
 學科と交互錯雜して居るといふの一點でありまして、
 諸君も於ても一應は必ず左様の考慮があるものと存じ
 まするから、左に聊か其判然分畫のあることを申上まし
 やう

却説本題地文學あるものと或は錯雜してせぬかと案じ
 られる學科と何でありませしやう、今著者の考ふるとこ
 ろでは多分地理學、博物學、理化學等であらうかと思
 われます、之を例すれば、地理學に於て既地球上の
 山川海陸を識りたるが如き、博物學に於て動植二物を
 辨へたるが如き、理化學に於て光線の規則又は水、空
 氣等の成分を修めたるが如き、隨分無理のあいありさ
 うを疑で御座りまするが、此等諸學と地文學とは決し
 て如斯る混雜をして居るものでもなければ、又學問同
 士相侵すものでありません、何とすれば前記四學科共
 に各其修むべき主意があつて一科をあして居るもので
 ありまするから、假令其學科と全じ物類を論じるとも
 せよ、苟も其論じる所の主意を於てと各々異るところ

のあるものであつて、之を例へれば、地理學で修める海陸山川の區別は現今世界の有形を識るだけのことであるのみ、地文學で之を獨り其形状の上からのみ論ずるのでなく、寧ろ其性質から論じ、隨て諸般の之に附屬せる体を論じると、海も在て波濤潮流を論ずるが如きものであります、故に博物學に對する動植物の關係とても全じ事であつて、地文學に在ては専ら氣候地質等の上から此二物の生存する理を見るのであるから、其實決して混雜の患の少ないものであるとは多辨を費さぬよ及びません、如此して各學科の分界は嚴然破るとの出來きいものであるとも多分御會得なりましたで御座りましやうが、固より其關係といふものがあいのでもありませんから、時として前述の如き疑團の出るのも

亦怪しむ足らぬとで御座ります

第七回 生理學

◎ライブニツク曰く
人の生る、や
其出産の時始て生
れしよ非らずして
特に其外貌を變ず
るよ過ぎざるのみ
彼れ其未だ母胎を
出でざるの前固よ
り既よ生存せり唯
だ其外貌の相異あ
るのみ然らば則ち

諸君、既に博物學の部よ述べましたる如く、大凡そ地球上の動物植物は皆其生活の機關を有て居りまして、之よ依て生命を保ち、之よ依て同類を孳殖してゆくのであります、苟も此生活の機關のありまする限り之隨て其形器の一個一個よ異つた功用があるよ相違ありません、而して又其形器にして一個處たりとも其物よ缺けて居るとか又之不相應のところがあるとかであつたならば、竟み其物の生活を保つとが出来難いか、假左あくとも必ず一生の不自由に相違ありません、生理學とは即ち此大切なる形器を究めて其功用を説明する學であります、之を再び申さば

人の未だ出産せざる前の外貌とは何ぞや曰く精虫即ち是れあり

生理學とは總ての生活物に就て其形器の功用を説明する學科であるので御座ります、而して之を二大部に別ち(一)動物生理學(二)植物生理學と致します、如斯大別を致せば、之を學ぶに當て諸君の必要より由て其何れを先みせらるゝとも宜しいとであります、此の中にも最も吾人は必要で、最も完全な形器を具へて居るものと、動物生理學中専ら人身諸器の功用を就て論ずるところのものでありまして、之を稱へて人身生理學と申します、然らむ何故に此人身生理學が吾人は必要であるかといふも、諸君は却て之を説くとの蛇足あるを御笑ひなされましやう何とあれど、吾人既に人間と産れて來て、今此よいふところの人身生理學の説明する諸般の形器

に依て生活して居るからにと、自己の事を研究すると爾餘動物及植物の事を研究するより遙に先であるからであります、然しをがら、應は諸君が生理學を學ぶ上に於て爾餘動物及植物の生理と比較して見て先づ自己の生理を擇まれただけのものであつて、未だ人身生理あるものゝ吾人は必要であるといふ本義を悉したものでありませんから著者は聊か之れに就て言を費しませしやう、諸君よ、諸君は前にも述べたる如く總ての動植物が各々其体具へて居るところの形器に依て其生命を保つて居るを御會得なされたならむ、吾人々間も亦全しく之れに依て生きて居るものであるとも疾く御合點なされましやう、然らむ吾人は各自其形器を損傷はぬやう

又は其活動を助けるやうすると依て、疾病を避け壽命を長ふことが出来ることも亦御悟りなされまじやう、是れを即ち吾人が人身生理を學ぶの第一主眼でありまして、苟も人として幸福多く生活せんと冀ひ、障礙なく一生を畢へやうと欲ふ限りは、凡そ此學を以て必要とするものは先づく無い道理で御座ます
 世間吾人に幸福を興へるものは其數實に澤山でありまするけれども、凡そ身體の健全あとの羸弱あのは生涯の幸と不幸の甚だしいものはありますまい、眞よ身體の健康は幸福の本でありまして、人々如何も其行を正し、其身を擡んで、又は其才力を顯はさんよも、皆是れ身體が資本でありまして、俚諺にも生命あつての物種とやう、如何ある大望も如何ある大願も身體

が脆弱いやうな施するも出来ねば成し遂でるも出来ません、而して此等の人々の不幸といふものゝ實は想ひ遣るも出来ぬ程でありまじやう、假又平々凡々別段爲す所のない人ですとも、病身だとう又ハ疾病の爲めには娛しい社交も入るも出来ねば、愉快を働さも出来ず、唯々身を顧みて嘆息する而已でも御座りまじやう、之を思ふても吾人が各自の身體と心を止めて天然の機能を損傷しぬやう、否寧ろ之を助けて愈々益々其功用を全うしめるやう力めねばなりません、彼の大學者スペンサー氏が能く此理を説いて健康を保つの一の義務なりと言われたるも眞に金言でありませう、況して孔子之身軀髮膚之を父母に受く敢て毀傷せざるの孝の始なりとて健康を保つを以て孝の

第一に置かれた位でするものを、若し已れの不注意不攝生うふ之を傷り損ふやうのものがあつては、獨り不孝の人なる而已であく、亦以て社會に對し造物主に對し、不忠不義と呼びられても辨解く途えありませんまい。吾人が生命を重ずる此の如く、吾人が健康を崇ぶる此の如く、既し此心があつたあつば、吾人の如何もしてり身體を等閑にするのが出来まじやう、然し其身體を大切にすると何でありまじやう、徒らに喰ひ徒らに寝ね、只々天は蒼いもの位で居ては決して此目的を遂るとは出来ません、宜しく天然の機能を適宜に用ひ、諸般の形器を保護するより他はありません、而して此形器を保護し機能を適宜に用ふるといふことを知るのは生理學より他ありません、吾人又骨あること

誰とてもし知て居るべきであります、吾人に耳目口鼻の諸官あつて視聞嗅食及び空氣を呼吸するとは誰でも知て居るところであります、吾人又手足及び指あつて能く運動し堪ることも亦誰とて知らぬものはありません、然しながし其口より食ふところのもの、手足を動かすところのものが果して如何なる機能よ由て身體又如何なる用をなすうといふに至ては、只々飢餓しければ食ひ動きなければ動くといふより外に知るべきがないやうでは、ナント充分なる注意を加へたと申されまじやう、生理學は善く此理を教へて胃腸の機能うら筋骨の工合血液の循環神經の各作用等總て漏さぬところでありまじやう、之を學べむ人々食物を用ひる加減うら手足を運動させる方法等を覺ることを得て、必ず吾人が欲するど

この健康を保つとが出来ましやう、是れ即ち吾人が各
 自心を用ひねをさふぬとであつて、一朝疾病又胃され
 るや、ソレ醫士よ薬よと騒ぎまはるに超すと何程う知
 れません、しかし生理學と其まゝ衛生の道でいゝま
 せんから食物其他の指揮は致しませんけれども、衛生
 も其根本生理から考へて編み出したのでありまするか
 ら、言はば生理なしは出来まい道であるとは申すま
 でもありません

人身生理學も就ては概畧述べましたが、爾餘動物及植
 物の生理學も就ては最早之を以て御推測をされること
 存じて、別段申上ることをいたしません、且や生理學は
 人身生理學を以て最も難かしいもの、即ち複雑な科と
 いたしまするから爾餘の動物等はは大抵人間の不完全

なものゝやうでありまして、諸君の學ばるゝも難澁
 が少さいで御座りましやう、故に諸君は先づ人身生理
 學を先驅として次で動物植物中必要に隨て御調べよあ
 るが宜いかと存じます

第八回 理、化學

諸君、諸君は既ち博物學に於て地球の表面及び其内部
 に在る萬物を辨識區別することを御學びなされ、又地文
 學に於て海陸山川の區別及び風雨寒暑動物植物の異同
 等を御知なされるところで御座りまするが、今亦著者は
 理學化學も就て茲に併せて御話し申すことといたしまし
 やう、然るも前以て述べ置ましたる如く、只一概に地
 球上の物とか、萬物とか云ひまはしては全生物を目的に
 各種異つた學問に依て研究するところあるやうに聞へま